

つれづれに

松井清子文集 一







## まえがき

令和六年（二〇二四年）の誕生日に九十一才になる おおな 媪です。

思う事のみ多くして記しておきたく思い、時々書いたものを、前後しておりますが、綴ってみました。

今年正月、小学校前、千葉神社境内で、毎日元気に遊んですごした「ていちゃん」事田中輝代さんと運命的に連絡がとれデンワで八十年ぶりに声を聞く事が出来たのです。

学令前、天気の良い日は、朝から夕方迄、飛んで、はねて、はしり廻りすごした日々でしたので、二人の媪が語り始めると、親を始め、姉、妹、ガキ大将の名前迄出て来て時のたつのも忘れる程のお正月でした。すぐにも会って語り明かそうと思いましたが、名前の出た人々は、もうみんな鬼籍に入られ、生きている私共二人も顔を見るのは、辛くなるかと、デンワと書き物に致しました。

昔は今にならないのです、この冊子の中だけでも

今は昔でなく、書き物には昔は生きてあるのです。

# 目次

まえがき . . . 1

つれづれに 一部 . . . 5

松井清子、思いだすまま、(R 5 6 / 3)

松井なつ、母の事を少しのべます。

昭和十年台の学令前、

清子の育った頃の一コマ、

火見櫓、

つれづれに 二部 . . . 21

戦後の日々を、思つて、 R 5 . 7 . 1 .

つれづれに 三部 . . . 34

〔誕生日 歳を重ねにやって来る 気を研ぎ澄ます、媪目がけて、〕  
「ひととのまじわり、」  
「家族の思い出」

つれづれに 四部 . . . 48

祭りの風景  
千葉女子高校とのつれづれ、

添え書き . . . 78





松井清子

令5年6月分

# つれづれに

## 一部

松井清子、思いだすまま、(R5 6/3)

松井の家の長女として、生をうけた私、千葉神社に社司として御奉仕していた祖父の松井龍雄と祖母の松井とくの孫として昭和八年六月廿六日(1933年)に、松井眞澄、松井なつの娘として、当時としては、目ざらしく、千葉大学医学部付属病院で生れたのであります。

後日、判ったのであるが、戸籍は「同居人の長女」と記されておりました。戸長は祖父、龍雄で父眞澄は次男故、同居人となるわけでした。

今と異なり戸籍は結婚によって作られる事なく、「家」を中心ですべて考えられたわけである。

祖母、父(次男でも。長男の伯父松井和夫は広島の高師師範の附属小学校の訓導として奉職しており、千葉には居なかった)、母と、女中二人の家に小さい女兒が授ずかったので、皆んなの愛情を、一人でうけ、母のなつも嫁<sup>よめ</sup>としての生活をしたが、女子教員として仕事もち、収入の道はある幸せな日々であったと思われる。

松井の家は清子が生をうけた時(昭和八年位)は「神社の清子さん」として、豊かにくらしただ家であ

つたが、初代、龍雄が御奉仕を始めた時は神社が、大変な状態の中へ（明治四十二年）祖父は単身で来たのである。

千葉神社の縁起をひも解くと、平安朝時代まで、さかのぼり六十六代の天皇、（源氏物語の書かれた頃）一條天皇が目病をわずらわれ、下総の「北斗山金剛授寺」に眼病平癒の願を掛けられ、病いが完治されたという輝かしい歴史があった寺院であり、江戸時代になり徳川家康公より、二百石の寺領の寄進をうけて十萬石の格式を賜ったのであった。世が明治となり徳川様よりいただいた寺領等、領地や格式などすべて没収され、個人の檀家を持たぬ格式高い祈願寺だけに、明治の御代は、大変で経済的に、ゆきづまり荒れるにまかせられ、明治卅七年に失火により、本堂であった、神社本殿は（同じ建物であったが神社本殿となす）焼けおち、社司であった千葉良胤よしたねは火中に飛び入り死亡したのである。

そのあとは、門前百姓を始め、崇敬者の面々によって復興を試みられたが、好き方にむかず、五年たった明治四十二年に、多方面の方々に歴史あるこの千葉の妙見様への復興奉仕に適した人をと、もとめたのである。その時市原の田舎の神主だが、この人ならばと推選されたのが、松井龍雄である。

市原は、八幡宿に八幡神社がありその宿場町に川

上きく規矩先生による「南総学校」という漢籍の塾があり、そこでの教え子の松井龍雄は、川上先生の強い御推挽により四十才近くという年令としで、単身千葉に、御社殿もなく荒れ放たの神社へ、年俸六十円という低い給与の中へ出仕したのである。

前任の千葉良胤大人うしの遺族は、墓地だけ千葉に残して、東京の下町へ越していったと聞いた。子供は親のあとをつぐでなく軍人になった様である。

その千葉良胤神主は、始めは真言宗の坊主となり「オオイ」と呼ばれていたが、明治と共に還俗して神主となり「千葉良胤」と名のつたが、あまりに神社は経済的にまづしく、木車に宮形をのせ、各家に出むき祈願をして歩き、祈願料をいたゞき、江戸期の妙見寺境内の様子を書いた絵姿を進呈していたらしい、事が、わかっている。（現物を見ている）

この良胤神主は、本妻の他に親しい女人が居りこの火災の時も、神社には居なかつた、と聞く。この家の子孫の人々は今も道場北町に住んで居る。ただ火災後、地元新聞等は、（現物を郷土館で見た）、同情的な気持はなく批判的なものであった。本妻は明治になってから、佐倉の家老の娘をもらつたと聞かされた。（良胤大人の孫の嫁、千葉郁子さんより）

これ等の乱麻のごとき、さびれた神社へ着任した新社司、松井龍雄はすぐに神社に入り、内容を全部

調べ確かめて、すぐに募金活動に入り、どんどんと活動開始にしたのである。

時の総代さん（氏子町内の代表）と一緒にその方の取りひき先様や、問屋さんなど、知れる方のもとへ、遠近とわず、出むき御縁をつないで行ったと聞いた。その意気と熱で復興の気は上がり一つ一つ道は広がり、成田山新勝寺さんからも、金壺百円の寄進をうけたのである。

これ等多くの方々からの御奉納で、大正三年御本殿上棟祭、四年落成となったのである。（満六年という月日がかかったのである）

この始め頃は、単身での活動故、なかなか、朝夕の食事も思う様には、出来ず、一切れの塩ザケを眺めて冷飯を流し込む様な日々だった、と祖母から聞かされた。神社からのお給与は一ヶ月五円では、始めから足りず、市原の方に「金を送ってほしい」という手紙が常でして、漢方医であった松井家では、畑を賣り、田を手放し、薬りを賣ってすごした様である。

私の父、眞澄は、女親の生家の鈴木家（一本櫓）にあづけられ、小学校にゆかしてもらい、姉の杉田千世（伯母）は、千葉の神社総代さんの和田家に女中に、松井和夫伯父は親せきの「佐是」の家へ作男にと、バラ、バラとなって一所懸命に過ごし、勉強

に励げんだ様であります。

その頃の小学校は四年迄（義務教育）、高等科が二年で、仕事に付いたものです。父眞澄は高等科二年間、千葉の本町の高等小学校へ行けました。

父、眞澄は親元から学校へゆけて、勉強する事がよほど、楽しかった様でして、この時のクラス、友人とは、終生心からうれしそうに交わりお話しをしておりました。

そして、千葉でのクラス、友人の何人かは「院内小学校はおれ達が一番だったが、松井という、チビが来てからは、むつかしくなったよなあ」と言う事を聞きました。しかし、本町の高等小学校が修了すると中学校へ受験ですが、成績が良くても千葉中は五年の間、学費を収めなくてはならず、受験せずに、千葉中学の理科の先生の準備室へ助手として入室して、同窓の友とは一緒に勉強はかなわなかった様でした。毎日の仕事ぶりを視て、その先生から「この助手だけでは、何の資格も得られないから、君なら、教育会へ行ったら良い、代用教員の免許がもらえるから」とすすめられ一年間だけの勉強で、小学校へ奉職する事が出来ました。

この時、寒川先の五田保の小学校へ勤務しいちばん若い先生として人気があったそうです。学生服で一生懸命な表情は（これは写真をみて）、良くその

日常がわかります。

その時の純毛の学生服は、戦災後、娘の私が、女学校に行った時、ほごして洗い衿をテイラードカラーに直して千葉高女卒業迄着た学生服になりました。純毛の、確かりとしたサーヂでとても私には気に入った紺地の洋服でした。今も納戸に鎮座しているはずです。

長男である松井和夫伯父は佐是の親の作男等をしながら勉強し、他人よりおくれて、千葉師範に入りましたが、優秀でして卒業後、千葉本町小学校に奉務致しましたが、すぐに広島の高等師範の附属小学校に呼ばれ、奉職し、後日、千葉県に帰って来ては、教育界で松井和夫は有名な校長さんで、ながく奉職致しました。

その子供達は又、皆んなすばらしくどんどん自分の進む方角をきめ確かりと歩み、地に足をおろしておりました。

千葉神社奉仕の松井眞澄は（神職資格を、奉務しながら、試験で合格し、）家長の龍雄大人のもと順調にすゝみ、女の児のみの三姉妹を授かりました。祖母の松井とくは、子供の時「中耳炎」をわづらい、八幡宿迄、牛久より、養老川を舟で医者に行つたそうですが、直りきらず、耳が遠くなつてしまい、漢方医であった松井家に田畑を持って、養女に来た

そうです。

生家の鈴木家は資産家で現在村の役に付き、松井清子家とは、親しくおつき合いを致しております。漢方医の松井家は、二代つづいて子供に恵まれないうち、鈴木家からの養女、「とく女」のもとに、婿をむかえました。その婿養子の龍雄は、杉田家の次男でした。となりの字の杉田家は代々の神主家でした。長男が病弱の為、次男の龍雄が、神主の勉強をし、八幡宿の南総学校で学び、資格をうけ、実家の藪区に入る時、村々にある神社毎の祭礼の時は、兼務して居る神社に出むき祭事を奉仕する事を、約束して田畑を持って松井家に来たそうです。

つまり普だんは百姓をして、漢方医家としての薬草畑などをやって居り、その平穏な生活の中に三十九才にもなつて、天下の千葉の神社への奉務の話しが、舞い込んだのですから、ものすごい大変だった事と思います。

始めは、龍雄一人のみの単身赴任でしたが、生活してゆける状態ではなく、一年の給与が六十円という事でありましたので、火災から五年間もの間、専任の神主が居られずになつたと思われ、手が付けられず荒れてしまい、まとまって居なかつたのが、わかります。

市原の留守の家族は、ばらばらになって働き、千葉で復興の仕事を一所懸命にしている若い婿さんの龍雄大人のもとに、生活費は送金しなければならぬ、養父母は、とんだ者を養子に迎えた、なげいたと思います。「金おくれ」の手紙が来るたびに、田や畑を手ばなすのは早く、住む、家も、屋敷もなくなり、その広かった薬草畑や建物のあとはすべてひと手（他人）に渡ってなくなり、賣る事の出来ぬ墓地だけは、江戸時代中ばからの墓石と共に杉山の中に残っております。

今は杉は切られてなく、竹藪が、深くなり、松井清子が、管理し墓掃除は、きれいにされております。この墓地は、私清子が女学校に行つてから始めておまいりに、つれてゆかれ、ものすごく寂しい山中の墓場という、印象を持ちました。

その後、市原の牛久まわりの神社廿八社の宮司を、父眞澄大人のあとをひき受け、祭事奉仕の後、時間を見ては御詣りする様にして管理をする事になり、現在は牛久の総代さんで葬儀社をやっている方に年四回（正月、春秋の彼岸、八月のお盆）掃除をたのみ、お詣りに娘夫婦に行つてもらっています。

船橋の伯父は、「松井の墓はその身内が、村中に居るのだから、そんなに気を付けなくとも良いのだ」と言つた事を聞いたのですが、私共千葉に居る者は、

色々聞きますれば、松井を名のつて居るのですから、しりも守りするのは、当り前と信じて、やつて居ります。

祖父は昭和十三年三月二十二日に肺炎で、二日程床に就いて他界して仕舞いましたが、遺言としてはなく、墓は市原でなく千葉に神葬墓地として、しつらえる様にといいのこしたそうです。「功なり名とげ」て、千葉での千葉神社々司として一生をおえた時、市原の漢方医、松井家の墓でなく、新らたな一つ家の始まりとして墓は、千葉で用意してほしいと願つたと思います。

龍雄大人は、松井家の養父の墓は確かりとした石造りで「松井龍徳」として佛教の墓でなく造られております。

今の世は、「墓詣り」は大変とか、その家を守るのは、めんどうとか、と墓じまいをする人が、多くなつたと聞くと、私、清子は、何とさみしい事を言うのかと、現代の風をうらみまます。出来るだけの事をすれば良いのですから。あの世に逝つた、父や母が、いつ（何時）でも若い人々と語りあつてゆける墓です。

我が家は、内孫は女子二人ですが、二人とも、おむこさんを迎えるべく願つております。

「願うことは叶う」と夫高明大人は常々言つて居

りましたが、その通りだと思えます。

この松井の家には、千葉と市原に墓地が二ヶ所あるわけですが、その諸がかり位は、別途にして、他に支出出来ない様にしてゆきたく願っております。

時代が、変われば、すべてが、変わり、母が、松井家には不動産が何も無い、機会があれば、もともとおきなさい、と、色々心配してくれて、松井清子名義の不動産は、検見川（駐車場）と、祐光町に樹木を植えてある庭で（百七十坪）榊（神様にお供えする）や梅を植えてあります。

松井本家のある院内の八十坪ほどの宅地と、總三階の居宅がありますが、他人には、ぜったいに貸さないという事にして、税金だけ払っております。梅の實は良くなり、多くの人々によるこぼれており、自己満足して居ます。

松井なつ、母の事を少しのべます。

明治四十年七月の生れでして夏の暑い時に皆んなに（農繁期）せわしい思いをさせたとき常々言つて「なつ」の名を自かくして居りました。

小中台村の自作農の家でしたが、何人もの作男や下女は使つて居った家でしたが、男子には学問（をじ二人が、大正大学と獣医学校に行く）をさせても女子は、百姓に嫁にゆくのが当り前と考える自作農でしたので小さい時から、元気が良く勉強もホドホドにやり、家の手伝いも良くやつた様で、部落の子供達での遊びでも、すばやく男の子とも互角にやりあい、サツト竹棒でなぐつて飛んで逃げる位のあねさんだったと、同年配のオヂさん達から聞いた事がありました。その、なつ母さんは、高等科二年が、終る時に、女でも仕事を持ちたいと、授業料のかからない女子師範に是非ゆきたいと願ひ、家の手伝いは、今迄と同じく、朝早く、台所をやり、桑の葉はオカイコにあげる程をつんで、あたえる事と言われ受験した様で、小中台の家から、京成稲毛駅迄3キロ余りの道を、雨の日も寒い日も、サツサと歩いてゆき、千葉の京成駅へ通つたそうである。女の子が、仕事を持つのは、電話の交かん手か、バスガールが良い方で、お座敷の女中見習は特別で、あとは、

水商賣の女達位で、女の学校の先生は、特別な人達だった様で、母は卒業するとすぐ、今の太宮町の山尾サンゴの小学校へ赴任したそうである。

女でも御給与をもらい、今迄の朝晩の家の手伝いをしなくとも良く、学区の中の家に下宿し、自分の時間の持てた事は本当に嬉しかった、と母は話してくれた。師範学校は、成績さえ良ければ、学費の補助もあり、現金を持ち出さぬ生活は、有難かったと言っておりました。

その就職した頃の昭和始めは、農家が、地租改正など、疲弊がきびしい時で二十才位の小娘の母が実家の税金を出した事もあったと母より聞いた事がありました。

昭和七年、川瀬のをじさん（県職の獣医）と神社総代の和田三治郎さんの世話で嫁に来た母は、結婚に付いての箆笥や箱物等の仕度や式服（留袖など）は、すべて自分の積立てたもので用意し、親に心配はかけなかったそうです。

これは、昭和廿年七月の戦災で焼け出され、小中台の家に、家族皆んなで世話になった時、「今迄、小中台に迷惑をかけた事はないのだから、氣を楽しく持っていていいんだよ」と言われ、ゆつくりとした安心で過ごした事でした。しかし現在とは違い、食べる物、着る物、すべて何もない戦中に、子供三人、

毎日食べて飲んでの日々は、のべて二十日余りでしたが、つらいものでした。千葉での生活は、戦中とはいえ、のんびりし、物資も、そこそこ有りましたので、自分の家でない所で小学六年生で、生後十ヶ月の妹の世話をして、洗たくしたり、重湯を作つて飲ませたりは雨の日など一緒に泣いたものです。「千葉に帰りたい、」とれだけ思った事でしょうか。すぐの妹明子は、村の子供達と遊びに行っても、泣かされて帰つて来て、田舎の元気な男の子には、「焼け出され、泣むし」とはやされたものでした。夕方日が西に、片むくと、涼風と共に、カナカナ蝉の鳴く音は、今でもつらかったあの頃の、さみしかったのを思い出します。

おかしなもので、私は、家で好き勝手にやる事が何よりで、旅行で何日も家をあける生活はして居らず、飛行機で外国に旅した事ありません。

## 昭和十年台の学令前、

私の育った、戦前の日々の様子をのべてみます。昭和八年生れですから世の中、五・一五事件の次の年で、さわがしい世間でしたが、市原から出て来た松井家は、すべて市原の村での様式が、祖母の意のままにすすめられて居り、女中さん（二人）下男もみな市原郡の出身で、私の子守りのナツちゃんだけが、千葉の小中台村の者で、営いとなわかれて居りました。家での買物すべては、米屋も八百屋、魚屋、など、毎朝小僧さんが、御用聞きに来て、帖面につけて、ゆき支払いは、月末にまとめて、戸主の祖父がすべてやっておりました。

祖母は注文のみで、粗食であり、家の者達それぞれが当り前と、市原の名物の「納豆」や「豆藏とうぞう」は毎食あり、（四足の）牛や豚の肉は食べず、魚は、月に四日（一日、十五日、二十八日、廿二日）は、お頭付きの魚を必ず食べました。お月様の三日さんじつ（一日、十五日、廿八日、）と妙見様の二十二日、の四日です。

魚の種類は、タイ、ヒラメから鰯の煮つけ、目ざし、ごまめと、多岐になったが、いつも骨があり、ブリやマグロで骨のない魚の時はうれしく、お代りして食べた事は忘れられず、風邪で一人ねて、病室

にはこばれた平目の切身や、にわ鳥のやわらか煮はうれしかった。その上、六才位の時、遊びに行った、米屋の船橋屋の節子さんの家で、おひるに御馳走になった、カレーは、始めて食べただけに、こんなに美味しい物はないと、帰宅し、「今日はカレーライスお美味を清子は食べたの、おいしかったわ」と家ぞく皆んなへ、話したそうであり、一大ニュースになった様で、外食する事もない生活で清貧な神主家でありました。

戦争が激げしくなり、諸物資が配給になり、おついち一日、魚が、お膳の上になく、祖母が、「なんで魚を注文しなかったの、今日は、祭りの日のおついたち、だのに」と女中達に小言を言っており、「今は、何でも配給となり、好きに買えなくなったんです、」との言葉に気位の高い祖母の返事のないのが、可愛そうでした。焼け出され市原の田舎へ帰ったその後、の祖母が、「千葉に帰って死にたい」と言った姿は、今の私には、良く判り、九十才台だいのこの年令としになるとなほの事、心に滲みる年寄りの心情です。



## 清子の育った頃の一コマ、

清子が五才位の戦前、遊ぶ相手は、近所のお姉さん方（五才上の）だけに童話を、讀んでもらい、自分なりに想像する事の大好きな幼児だったので、「ありとキリギリス」は又とない「物語り」として、その世界に入り、その「アリ」の家へ行ってみたくなり、新築間もない、奥廊下の土壁を、オモチャの金棒で突きくずし、穴を空けてしまった。廊下廻りは土かべの砂ぼこりだらけ、空いた穴にはアリは居らず、落ちた砂ぼこりで座敷や板廊下を女中さん達はいたり拭いたりで大騒ぎのやと静まった中へ学校から帰った母は、たまげて、私に「どうして、こんな事をしたの、おじいさんや、おばあさんには、どの様にして謝るの、こんなに大きな穴を空けて、どするの」と、血相を変えて怒り始めた。私は、自分とすると、「アリ」の家を見付け様としただけなのに、と思っていたので、この母の言葉で大変わるい事をして、しまったと気付き、悲しくなり、泣きべそをかき、泣きじゃくり、祖父・祖母の前へ、大声で泣きながら母と一緒に「お祖父様、お祖母様、ごめんなさい、清子はアリの御家をさがしただけなの、こんな穴をいっくも空けて、ごめんなさい・・・」と平ぐもの様に前にふせ言葉と切れに泣いて

あやまった。母に頭を押さえつけられ、やと大変な事をしたと子供心にわかった時だった。

しかし、泣きやみ頭を上げた時、祖母は確かりと私を見て、「清子さん、あんたのやつた事は、大変な事でしたよ、判った様ですね、色々お話しを聞けば、それなりの夢が、あった事、良く判りました。それにしても、お母さん、清子はこの様に、心から謝っているじゃないですか、手を上げて下さいよ、この子は松井の家では、何より大切な、大事な娘です。」

この娘なりに一所懸命にやつたのですから、あの位は、修理すれば良いのです。泣いて謝っているのですから、もう止めて下さい。これ以上は、お母さんを、私は、ゆるしませんよ」と言った。

さわぎが治ってから、深夜母は小さな私を門の外につれ出して、ひくい声を押しこらし、「清子、今日の様な事をして、家中皆んなに、迷惑のかかる様な事はしないで。お母さんは、あなたを叱る事も出来なくなつて、家に居る事も、なくなるんだよ」と、涙ながらに話された。事の成り行きは、判らなかつたが、私が、好き勝手をすると、大変な事になるかも知れぬと、その後は、少し、おとなしい女の子には、なつていった。

今は、嫁さん（長男のよめ）が、主となる家庭が

多いが、戦前は、家の跡つぎは大切で、あるが、他家から来た嫁は、その娘の親（生母）でも、姑の前では、どうにもならぬ弱いものであった。

ひる間、女親が、留守の私は、祖母から毎日、色々と話され、「女の児は、心がけが、やさしく美人で、良い御縁に恵まれるのが、一番の幸福だよ」と顔をなせられ鼻を「高くなれ、すつきりと」とつまんでもらった一人天下の女の児だった。

家中の使用人すべて市原郡出身の者ばかりであったが、母は私の「子守り娘」は実家の村からと、「ナツチャン」を学校が、卒業するとすぐよんで、女中さん達に教えてもらい、この家の習慣になじませた。母は、朝食をすませ、私に授乳すると着物に袴をはき、小中台（作草部小学校）の分教場の学校へゆく。ナツチャンは、子守の仕事としての、赤ん坊の、洗たく物など終ると私を負って、稲毛迄電車に乗って、学校へ、おっぱいを飲ませにゆく。

ひる休みに、小使室でお乳を飲んで赤ちゃんを、見るのが、みんな（男児も女児も）とてもうれしく、むらがつてみたものだよ、と、後年その当時の教え子だった、旦那方より聞かされたものだった。

この子守の「ナツチャン」は、ながく松井家に居り、戦争中に嫁入りし、相手の婿さんの結核がうつり生れた子供と共に、三人とも死んでしまった。私

は畑町のそのお墓には、あの世で、三人の日々の幸せを祈って手を合せている。

家中皆んなの「温もり」と「いとをしみ」をもらった、たった一人の孫娘の私は、小さい時から、よく発熱し、仕事を持つ嫁の母は、子守りが居るとはいえ、大変であった。誕生日が来て、まだ言葉も言っていない頃、熱が出て、食欲もなく、だいても横にしても泣きやまず、医者殿に看てもらっても、「風邪をこぢらせたでしょう」と言うだけで判らず、家中こまりはてた時、市原から来ていた「善さん」が、田舎では、口のきけない小供には、わからない時、明かりの下、裸かにして皆んなで看るんです、どこが、痛いのか判るものです、と言われ、皆んなで泣く私を看て背中と、脇腹、腕、股等、各所にうっすら色付き、もり上ったところがあり、そこを押すとヒィ、ヒィと泣く事を見つけ、これは、大変、町の医者でなく千葉大学へ、すぐにと、連れてゆかれた。病名は癰（首・背中・おなかなどに出来る悪性のはれもの、痛くて高熱を伴う）と言われ、すぐに切開された。

ペニシリンなどない時代、各所の膿をガーゼにとり、毎日、取り替えて治療するのは、病人が、小さな児だけに、ただ泣くだけに、看病する者も、大変

で、治療の先生が来る治療車の音で泣きだし、毎日傷口へもり上げる贅肉を切る時はそのいたさで、一緒に泣いたものだと話してくれた。母と子守のナツちゃん、付ききりで半年かかりやっと退院となったが、右<sup>みぎ</sup>うでの肘<sup>ひじ</sup>の内側は今でも引きつれが残り、背中と右<sup>みぎ</sup>股<sup>もも</sup>には手術のあとが残っている。

昭和十年位で、言葉もうまく話せない幼児にこんな何ヶ所も切開しての、治療をしてくれた、祖父や祖母、両親の気持はどんなであったか、感謝の気持ちで、いっぱいである。賣薬の膏薬位をぬっていたらどんなになった事か。その大手術にうち勝った生命力が有ったとも思えるが、その後は、カゼもひかず、発熱もなくて、元気な、神社の清ちゃんですごせた様である。

令和五年六月で満九十才になるが寿命とは判らぬもので、生かされるといふ事であらうがたいと手を合わせるばかりである。

## 火見<sup>やぐら</sup>櫓<sup>ら</sup>、

戦災前の家は、昭和七年に母が嫁に来た時に建てた家だったが、総二階で、その頃はめずらしく、東から南へ、二階にベランダも廻り、神社境内が、目のまわりに四季の緑や月の夜など、よく眺められ、子供心でも静かに廻り廊下に腰掛けて夢を広げたものであった。東下の弁天様の池の脇に消防小屋があり、火見<sup>やぐら</sup>櫓<sup>ら</sup>が、当り前に立っていた。大きな梯子が真直に立ち上に半鐘<sup>か</sup>が下がり、金槌もそばに下り、どかに火事となると、頭<sup>かしら</sup>が飛んで来てする、すると梯子を上り、カンカンと鐘を打つ、皆んなが、たあつと集って消防小屋から、車と一緒に出てゆく、この手際の良い、男達の姿をみると、何回か始めから眺めて、「清子も、あの鐘を打つてみたい、するすると登れば打てる」と思ってジイット、よく見て居って、日に日に思いが強くなった。あまり人が出ていなくて静かなひるすぎ、いつもの、袂が長いゆかたを着たまま、サツサと火見櫓の下へ下駄をぬいで登り始めた。

一段、一だん寸法は長いが、歯をくいしばり、昇りつづけ、あともう少しという所で足がすべり、上の横棒に掛けた手に、全身がガンとぶら下ってしまった。着ていたゆかたの袖が風になびき遠くからも

良く見える様になり、「あれ、女の子が、落ちそう」と指さす人も出て来て、ガヤガヤとさわがしくなり、遠くが見えて、家の女中さんが、捜して居るのがわかり「ナツチャン」と呼んだが声にもならず、泣きなくなっていた。

手もいたくなかった時、下から、大きな男の声で「嬢ちゃん、手をはなすでないよ、今助けにゆくからよ」と聞えて来た。

歯をくいしばりジツトして、ぐっと押さえられて、下にもどって、ブアツト泣きだした。この間の時間はどの位かわからなかったが、人だかりに集った中にナツチャンは飛び入り、「清子さん！」の呼び声で、そのエプロンに顔を付けて、大声で泣き、助けくれた男の人に何度も頭を下げたのである。

「八百屋お七」ではないが、鐘を鳴らしたらどうなるか、など思いめぐらす事もなく、思い込んだら、やり始めるといふ無手法なところは、三ツ子魂変らずとか、話題に事かかない清子であった。

その頃のお祭りのにぎやかさは、いまでも話しになる程、それは、それは、にぎやかで御神輿様の還られる八月の廿二日は、近郷近在から人が来て、千葉に親せきの有る人は、うらやましいと言われる程の一大いちだいが憧れのイベントだった。

我が家でも、神社本殿其の他社務所は男性ばかり

で女子供は入れぬ故、女中達は、夕方より外出がゆるされ、皆、お風呂に入ってから、境内へ行きましよう。と、皆んな、着る物を揃え、風呂に交たいに入って居た。腰の曲った祖母だけ、残り、サーー出発となつた時、私が居ない、とわかり、母と女中達、二階から内庭まで声を上げてさがしたそうである。

その時表玄関の戸は重かったが、台所口の裏木戸が、少し開いており、風呂場が、はなれた所に有つただけ、皆なが、出たり入ったりで、気づかなかつた、と判り、「サーー大変、この雑踏の中へ入って行つたら」と皆、青くなつて手分けして声を、呼びかけ、汗だくでかけ廻つたそうである。境内外も御神輿様が、かえられる時刻になれば、人をかき分けて捜す事は無理と祖母の待つ家へ報告にもどると、動く事の出来ない祖母は、祈る様な声で「妙見様の大祭の夜だから、かならず、元気に帰れると思うが、たのむ、皆なして今一度捜してほしい」と、玄関の外にすわつて言つたそうである。芝居小屋もあり、人だかりは、山の様でそれ等の中に小さな女の子の姿をみつけるのは、ぜったいに無理と、ナツチャンは、あたしなら、食べ物屋の並ぶ方へゆきたい。だから、一番遠くにあるけど、本町通りの方の鳥居そばへと、ただもくもくとあるいたそうである。何軒かある「おでん屋」のテントの中に聞いた声がある

と、ヒョイとのぞくと、女の子が、うれしそうに皿から、串しぎしのおでんを食べて「ナツチャン、おいしいよ、食べなさい」と声をかけて来て、又々びつくりして、店の人にわけを話して、御札を言いつれて帰ったそうである。

子供に年令としの一番近い「守り娘もりむすめ」が、小さい児の気持がわかったのだと思うが、いつでも、まわりの人々に心配をかけた子供だったのは変りなく、何時も神様に守られたのは、確かりと今も信じて居るところである。

昭和十五年、数え八才で小学一年生として入学し、院内小学校へ通学し、毎日で好き勝手をして居た私は、一つの規きまりのある学校は楽しく、始めて弁当持ちの日のうれしかった事と、鰯いわしの塩焼きの骨が、大変だった事を覚おぼえている。

小学二年の時、風邪より腎臓病になり三ヶ月程休学している間に学校では、戦争時を予測して学校給食を始めていた。

児童各自は弁当箱に飯を持参し、学校で、「味噌汁」「ごま塩」「漬物」「佃煮」だけで、「梅干し」は入れて来ても良しと、いう。どの家でも、一番毎食に近い物であったが、当の子供達には、何とも美味うまい、おいしい物であり、九十才の今も、味噌汁だけは、かならず食べている。この頃の味噌汁の実は、里い

も、又ナス、などのしみだった。

大東亜戦争が、激げしくなり、物資がすべて配給制になり、味噌汁の実が、淋しくなった頃、子供等は、だんだんと、食べる物で戦争の深みを味ってゆき、隣近所の友達の良さも判って来た。

千葉の街にも、東京や、大阪等、から疎開として引越して来て、転入する子がふえ、また千葉の子がもっと田舎へゆくなど、さわがしい空襲の日々に変わっていった。

小学校の六年が終れば、女学校への入学試験があると、小学三年生位より言われて居ただけに、私など、緊張の日をすごしたものである。

母がよく、「ここのお母さんから、この家では、男の子が授かれれば、千葉中学、女の子が授かれれば、千葉高女へゆかれる様に育てて下さい」と、言われたものですよ」と話して居り、塾など無い時代に入学へのなみなみならぬ思いを聞かされていた。

戦災後で電気もまだない時にローソクだけで、バラックの一室だけの中で、勉強し、昭和二十一年四月になってからの入試に合格した時、母のよろこんだ姿が、忘れられない。あの頃は、女学校は少なく、千葉県下、南の館山や市川、成田等、ずい分遠方からものすごい汽車をのりついで来たものだった。

入学した千葉高女だが、戦災で校舎もなく、各所

に借り校舎で六年間を勉強した事になったのである。それだけに結束力が強く、千葉神社の松井を中心に現在もつながっている。

焼け出されたその千葉高女は、私共二年から三年にかけて、学制の改革があり、六・三・三制が始まり、私共千葉高女組はずい分と、プライドをきずつけられ、新制組との学力を比べたものであり、男子生徒もうけ入れて、校名も、千葉二高（校）となり出発したが、女性陣がよく、男子の入学希望は少なくなり、六年程で校名ももどり千葉女子高校と直って今日に、致って居るのである。

男女共学を、希望しなかったので、世間の風が遠のき、昔のおもかげのない、校庭になっている。私も自家の子女を千葉女子に進める事は、あきらめ、その娘（こ）の進路をとる様にと、思っている。

今、私学は独自の特質を出すべく励げんでいるが、ここ千葉の地も、面白い受験校も出て来ている。

私学というと、私が、短大二ヶ年間、御指導いただいた、「大妻女子大」は、本当に心より、良い学び舎に御縁があったと、感謝しているのである。学祖であられる大妻コタカ先生に親しく、御宅へうかい詩吟の御稽古（けいこ）から始め、細かい事の一つづつ、御声かけ、示され、いつも何かを、思い出してなつかしんで居るのである。戦中から焼け出されてから

の小学校、女学校が公立であっただけ、私学の開かれた、学園の明るさ、良さは、田舎者だけに、事々に身にしみた。

妹二人と、長女は、つづいて大妻に進学したので、長女の私は、同窓会とは、ずっと續けて寄附もし、協力を惜しまずやっている。

大妻学園も大きくなり、私など、どの学校と聞かれる前に、「大妻ですの、コタカ先生に直かに御指導いただいのです、」と言って日々すごしている。幸せである。

母校と呼ぶにふさわしい学び舎である。

神社は戦災復興の最中で、高校に六年も行き、その上、東京九段にある大妻にやってもらっただけ、卒業すると、すぐ神社の助け人として出仕する事になった。三月十八日に卒業し、四月十八日結婚し、明治神宮に奉務していた、中村高明をむかえ、若手二人が、千葉神社に加勢する事になったのである。

明治神宮も戦災で、御本殿の復興の時であり、数多い神職が、奉務するだけ、御給与は、わづかで、私も、家計簿というものを始めてつけた。（今、その帖面を見て若い日を思い出している）毎日の草とりや掃除などでくたくさに疲れて、帳簿をつけるのは、大変で、三ヶ月もやり、帖面付けは労力だけムダとやめてしまった。

出る金は、どうしても出る、ムダな支出は、して居ないと、今でも、帳簿らしい事はしらずに、振り込んだ事だけを書き物忘れの、おさえとして居る。

昔は、神社や、おけいこ事など普通に御包みして納めた時など、領収書はないのが、当り前だったが、現在は、医療関係など、細かに帳簿にまとめ、年末に届け出る様になっているので、そのつどが大変である。

後期高令者となり、こんなに、多方面の医者様に世話になるとは思ってもみなかった。

普だんから、血圧を見、血糖値を計り、毎日、体温を計り、体重を見、メガネを何種類も揃え、歯医者へゆき、何種もの予防注射をやっているだけ、自分の生活を規制させているので、日本の年よりは、長生きになった。有難いだけ、複雑にもなって来た。

若い家族と同居でなければ、年寄り一人で生活出来る様でなくては、ならじと、すぐ、娘家族と一緒にくらす人が、多くなり、女系家庭となって来ている。

家を中心に考える時は、長男がどこまでも一族の中で主となり、一度結婚して家を出た者は、どこまでも影の人として居たものである。今は、女の娘でも仕事をもち、一人の人間としての収入があれば、好きな仕事を持って生きてゆける。

又、一ツ家の経済は主婦がとりしきり、主人の男も従っている。

まさに古代に於いて子孫を生む事の出来る、体が大きく丈夫な女性は多くの働き人を有する、大刀自として多くの財を持ち、その部落（集り）の中心、オサである。

天照大御神や、スセリ姫、など、巫女としての靈力があれば、直の事、大刀自として、一族の中心に居れたわけである。

その頃の結婚は、しょうへいこん 招聘婚で、その家の丈夫で美しい娘の腹に出来た子は、その生れた女性側一族の宝であり、力になったのである。毎年の様に、丈夫な男子を生めば、働き手となり、美しい元氣な娘なれば、なおの事、その群は大きくなり、強大になったのである。変らぬ月日が、續けば、良いが、「天変地異」もあり、「戦くさ」がおこるのが、常である。戦いとなれば、男性の強い力が必要となり外へとどんどん出てゆかねばならぬ。これ等、一族の緊急の時に、強い男性が力を持ち、その群は、大きくなるのである。

神功皇后の朝鮮出兵などは、その一例と思はれる。戦さが有るたびに男性の力は大きくなったのである。

歴史書をみれば判るが、江戸時代で日本は男性だけの天下社会になったと考える。それに引き替え、

戦争後の日本は、なるべくして、女性が、家庭の主  
となつたのである。

我が、松井神主家は、女の子ばかり生まれ、男性  
は他家から、さずかり、それぞれに立派に神主家を  
もりたてて居られる。家庭の躰こそ女性がうけ持ち  
確かりとする事が、大切と信ずる。

私の古代史の解釈であるが、女性が主となって、  
活やくしていた頃をみれば、出雲の大国主命の神話  
も、イナバの白兔の世界が、はつきりと、女性が大  
きな力を持つており、多くの男性がそのもとへはせ  
参じてゆく途中の事である。

そのあとの物語りを見れば、色々と為めされ、お  
そわれた時、スセリ姫は助けてくれて、大国主は、  
その族の長オサになれたのである。

そして丈夫な子を生んでいる。その子等は又、良  
く働くのである。



松井清子

R 5 . 7 . 3 0 .

# つれづれに

## 二部

戦後の日々を、思つて、 R 5 . 7 . 1 .

「一夜乞食」と言う言葉があるが、まさに私達戦災で何もなくなりその上国として戦さに敗け、今迄持っていた地位や、財産、諸々の物や、知恵や能力等、あれよ、あれよと、見る間もない程に、變つてゆくのを、肌身に感じて勉強した者達は何を信じたら良いか判らず、女学校にゆけた楽しさよりも、毎日迷う事が多かった。

地もと小学校では、みんなが、焼けだされで間に合せの筆箱やはき物、帖面で良かったが、高等女学校六十名のクラスで、戦災をうけた人が、三名だった、のには、つくづく、ここは違う学校だという思いを強くし、子供なりに、確りしなくてはと思つたものである。まず、口数の少なく様子をじっとみる、地方から来た人々と、都会の、人数多くが入学した千葉大学附属小学校から来た美人さんは口数多く、まわりを煙りにまいて家から持参した写真帖などをクラスの人々に見せてグループを作っていた。

女学校は英語という今迄にない学科が加わり、その方面の知識がなかったので、始めからわからず、苦勞する事になった。まず辞書をやっと買ったが、

一番、わるい簡単なもので、発音記号もなく、カタカナのみで、よみ、その英語の時間を、ゴマカして、すごした事だった。

その先生は、基礎的な事は教えず、パッパと読み、日本語で話して、時間が終ると、生徒より早く教室から出て行った。

家でいつも相談できる母が「英語は家ではだれも判らないから、そのつもりでやるのよ」と先に言っていて、いたので、別世界の事として全部判らぬまますごしてしまった。

他の教科は、大して予習、復習しなくても、何とか学校での勉強ですぐす事が出来た。

家では、神社の事を、すべて手伝い、神社神主の娘が、お正月やお祭りに、学校での勉強の他に、家で手伝いもしずに机に向かうとは、納得が、ゆかぬと、言われたものである。

実際、家に女中さんは居らず、境内に畑に、人手は足らず、当り前として良く手伝ったもので。今の子供達の学校より帰宅後の「塾通い<sup>がよ</sup>」とは違うが、父母の手伝いは、それなりに楽しかった。

色々な下世話な事も耳にして学ぶ事が出来た。

家には、本や写真など、すべて焼けてしまい、昔の面影のあるものには、見はてぬ夢を追う様になる事多く、戦争さえなければ、こんな惨めな事がない

はずと、思う事が多くあった。

まず神社が復興にとりかかったとはいえ、氏子、崇敬者の方々に御寄附をあおいで仕事を始めたので。氏子町内もみな戦災をうけ焼け出されて居り、なかなか、予定通りとはゆかなかった。

社入として望めず、たまにある地鎮祭や、上棟祭の祈祷料位なので、續いて進学した東京の大妻女子大学へ高い授業料を心配してもらうと、現金を支出するので、自分で出来る事は、衣服を縫う事など、買わずに間に合わせた。大妻での教材に、着物、羽織等を用意する時は、母の嫁入りの時の着物をほどこき、洗って、板に張り、して持って行ったり、母が、学校で着た白のブラウスなど、洗って、ほころびを縫って着て行った。

下宿したり寮に入ったりは、夢にも考えられず、二時間余りをたつたと通学した二年間であった。

大妻女子大学を選んだのは、その年の短大では、授業料が、一番安かった事と、学科に英語の入試がなかった事である。その上、中学校の教師免許のいたゞけるのが、有難かった。教育時間は、四年制のやる内容を二年間でやるだけ、毎日、いそがしく宿題が多くて、まづまづ、暇<sup>ヒマ</sup>なく大変だった。

その上入学式の時、上級生の詩吟があり、希望する方は、申し出る様にと言われて、始めて、オケイ

コ事に入ったのである。これは、大妻コタカ先生の御宅へ訪い、外部より先生を招いての勉強だった。大妻コタカ先生という名前は聞いた事があるだけで、何の知識のなかった私には、(大妻先生宅のオケイコは、千葉の田舎から来た苦学生の私にはまさに)天佑の如きものだった。

校主先生の御自宅とはいえ、戦災後の私の家と同じ位の、小さな平屋で、タタミの八帖と六帖間だけで稽古し、大きめの火鉢が、一つあるだけで、生徒は寮生が多く通学生は、千葉からの私一人であった。大妻先生も一緒に学ばれ、約二時間、週一回で、御月謝は、私の小遣いで足りる位で、足らぬは、大妻先生が出してくださった。

その二間の先の押入れの様な板戸の先は、神棚と御霊舎みたまやとなつて居り、私は、敬神家の家の造りを始めてみて感激したのを覚えている。

十五・六名位の生徒をみて、先生は、火鉢の炭のつぎ方、又鉄瓶の乗せ方等色々な事を教えて下さり、寒い夜等、など「雑炊」ぞうすいなど用意して下さり腹ぺこの学生と共に楽しんだのだった。又先生は、人相もよくみて下さり私に「松井さん、あなたの「額」ひたいは広くはつきりしている。髪でかくさず確かりと表して生きなさい、運が、広げますよ、」と教えて下さった。

前髪をたらず事はやって居た時だけに、私には、肝きもに銘じられ、事ある時は、確かりと、顔の全部を出して事に当る事にしてるのである。

毎学期毎に開かれる詩吟の大会に、上手でもないが、一所懸命にやる時、先生宅での教室が想い出され、私学に於ける「学祖の心意気」というものに感激したのである。

大妻先生は、この時期、戦争中の活動のため公職追放にあわれ、学校に入れず、自宅で希望する学生にのみ教えて居られたのであり、辛い時だったのである。

電車に乗っての二年間は、お小遣とて豊かではなかったが、千葉二高(新制せいでは千葉高女でなく、千葉二高となった)とは違い、市ヶ谷での乗降は楽しく神田神保町等の本屋街も九段坂を下つて、どこ迄も歩き、靖国神社参拜も友をさそつて歩き、拜観し、少し小遣が有る時は、皇居のお堀の「千鳥ちどりヶ淵がふち」のボート場へも院内小学校時代の友達と男女を問わず行つたものである。

あの頃は戦後もやっと着物を着られる時代になつたので婦人雑誌が、三月すぎると浴衣ゆかたの新柄を、モデルさんが着た姿で発表した。その「新柄浴衣」が、反物で何十枚分も、学校へ学生さんのアルバイトで縫う様に持参された。一着の縫賃が三十円位で、普

だん、宿題で、どんどん縫っている私達には、有難い御仕事だった。

ただ一日か、二日で仕上げるだけ「特急」というわくは大変で、母に手伝ってもらい二日で五枚位は仕上げて、良いバイトだった事を覚えていいる。母と二人、はだか電球の下夜も深く二時過ぎまで、シャツ、シャツと両手を進め織い進み仕上がった浴衣を学校へ持参し、御金をいたゞいた事は忘れられない。外へバイトには、行かず、学校内ですごしたので、先生の信頼も得られて、卒業の時は、岩松マツ教授より「雄鳥社」へ入社しないかとまですゝめられた。

「雄鳥社」は手芸等の専門の出版社で有難いお話しだったが、私は、卒業後すぐ結婚がきまつており、復興途中で人手の足りない神社があり、外部へ出る事は考えられず、おことわりした。

三月十八日が、短大の卒業式で一ヶ月後四月十八日が結婚式となって居たが、学友の、だれもが、結婚となった友人もなく、世間的な事が、判らないだけ、田舎式に一家をあげて春の、嵐の日、完成間近かの千葉神社で挙式したのである。

戦災後に出来た社ム所、和室の式場で式をやり、写真を写し、片づけて披露の和室として新郎高明さんの大学の教授や、明治神宮の伊達権宮司様など、

おみえいたゞき、高澤信一郎祢宜先生に仲人になっていたゞき、千葉神社総代の萩原豊二氏に千葉の仲人（この頃、仲人は双方に有って、二組であった）を御願いした。その上、松井の家の親族、中村家の方々と、よく、あの田舎の座敷へおいで願ったものである。

官社と民社も判らぬ千葉の、総代さんの中では、明治神宮の宮司さんの息子さん、来て下さったと思つた人も居た。娘が学校が終つたら早々にムコさんを迎えなくてはならじと父は、父なりに各方面にたのんで居たのであろう。

国学院大学の研修部に、良く勉強にはげみ、ムコに最適な青年が居る、と御話しがあつた。

生家は横浜で、神社関係でなく、学校は商業学校を出て、会社員となり、戦争にも行き、戦後は、横浜港で米軍のキャンプの仕事もして、その後、国学院での短大相当の神社関係の部に入學し今は、明治神宮に奉仕している、との事を父が聞いて来た。その話しの始めに私は、四年制の大学へも行かず、神主家の関係すじでない生れに、すぐには、合てんがゆかず迷つてしまった。私みたいに学校しか知らぬ者には、各種の会社や、米国のキャンプや港の仕事など聞くと、まず、おびえた。どんな、外の世界を知っているのかしらと思つたが、「戦災をうけ、

借財が、多い田舎のお宮に、ムコに来てくれる人が居るだけでも有難い事だよ」と母に言われ、それもそうだよと、思い、千葉に一度来てもらったら良かったも、と、春雪の残る昭和二年一月廿二日の新社殿の手斧始祭ちようなははじめさいに、祭式教授の御供として始めて、千葉神社に来ていた。づいた。

寒くはあったが、晴れた日で、千葉神社では、総代さんや、建設役員諸氏が揃って東京からの二人の客人をむかえた。

私は、お茶を出したのみで、良くは判らなかつたが、千葉神社は、境内地は、都市計画途中でおちつかず、樹木らしい樹もなく、すべて途中と思われる景色だった。

御縁とはこの事か、特に不可もなく来て下さるなら幸いと思ひ話は進み、私は、その年（短大二年）の夏休みに国学院大学の夏期講習にゆき、神職への道を進んだのである。四十日余の神職勉強で、十名位の神主の親友が出来、とても有意義の勉強会であった。

その時宿題の祝詞の作文や祭式等、むつかしいものは、皆、中村高明さんにやってもらい、その実行力の有る事を、確かりと知り、神主家の生れでなくとも、その気持の有る人が、まず、第一で有る事を、思い知り、尊敬の一步を得た講習会でもあった。

簡単な葉書を出しても、確かりとした返信の手紙が来て色々な事を教えてくれる。これは、気位のみ高かった私には、まずまず両手をあげて万才であった。私とは生きた日々が長かったばかりでなく、簿記、ソロバン等すべてに於いて優秀だった。

私の高校（千葉高等女学校）も、実際社会とは違い、単なる、お勉強で、眞違つても、点数が、わるくなるだけ、の事で、ソロバンの一級とは暗算がすらすら出来、筆で書いても、外部へ出せる等、私の知らない、世界だった。

これは、御奉仕していた明治神宮も、戦後の復興の時で、全国に募金の要請ようせいで、宮司さん始め、各方面に御声をかけて居り、役員總代会議は、大企業の代表の方々と、秘書の方は会計的の事は堪能でどんどん質問されると、公家さんや神主家で教育された方々では、説明が出来ぬ事が多く、彼は重宝された様であり、御役に立てたと聞えて来た。

簿記やソロバンの達者は、明治神宮だけでなく千葉神社でも必要だったのである。

短大出ただけで、外の世界を知らぬ私は、一番苦しい神社からは、御給与はいたただかず、毎日、早朝から掃除、草とり、来客へのお茶出し等、何でもやり、大妻での毎日着用していた服で過ごしお金の出ない生活をモットーとして、一日一日、はげんだの

であり、この頃、家計簿を始めて付けて、生活するむつかしさを味ったのである。

そんなある日、明治神宮をやめた高明さんのもとへ権宮司さんの伊達先生始め十名位の神職さんが、千葉県へ来たので、松井高明さんの千葉神社へお詣りして様子をみたいと突然に来てくださった。まともっていない境内で、お茶を出したのみで、茶菓子もなく、窓の外をみると、裏庭にイチヂクがたわわになっっているのが見えたので、急いで、もぎザルに山に盛って皆さんにお出しした。お茶を飲んで、一息ついた所だった故、手にとられ、皮をむき「これはこれは、美味、うまい」と、喜んで食べていただいた。伊達先生は「イチヂクは私の好物なんだ。おいしかったよ」と言葉をのべて、お引き上げになった。

田舎の貧乏神社へも、もとの職員が、どうして居るか、お寄り下さったその御心づかいがうれしくもあり、皆さんの意にあったイチヂクがあり「よかつた」と思った。なつかしい「コマである」。

神社建築では、日本一と言われる先生に作っていただいた設計図で始った御本殿の建設であるが、計画通りに、町内寄附はすすまず、約六割位で、止ってしまった。毎日金庄棟梁を始め工事は進んでいるので、今後どう進めるべきか、と氏子総代会議は、

熱を帯び大変だった。臼井氏を始めご自分が事業をしている方は、「仕事を途中で休んでは、ダメです。借り入れをしても完成させる事が、大事です」との事で、各総代さん個人の金を出していただき、千葉信用金庫より、六百万円余を借りる事になって、事業は続けられた。神社で借金をするなんて、私など考えられず、お茶を出す手がふるえた。この時、総代さんの信用だけで貸して下さったのは千葉信金だけで（他の銀行は×）その後、ずっと千葉神社は信金さんとのみ御つきあいを續けたのである。

毎月、わづかの収入より、工事方の賃金を支拂い、借金への（毎月きまった）返金を支拂い、残っている借り入れ金の利息を拂い、していると私など御給与をいたゞく事など、考えられなかった。その中でも町会よりの寄附は少しづつ進んだのは有難かった。

本殿建築も進むと材料も入れなければならず、寄附の帖面上の方々に（帖面は付けても現金はその時、入らぬ）、お金を納めていたゞく様に、たのむ事も仕事となり、世間知らずの私でもだんだん判って来た。

その中、有難い事に神社へ良い風が吹き始め、仮社殿でも結婚式が、ふえて来て、御祈願の件数が、社入としてふえ始め、神主の個人収入となる私祭（地鎮祭や上棟祭等）も数を増し、工事が進んで居ると、

御参拜の方々もふえ、毎日夕方集める御賽銭もふえていった。

学生の頃から、夕方の賽銭集めは私の神社での仕事で一番永くやったので、時の世相がわかり、思い出も多い。

高校の時は、教科書を買ひ、毎月授業料も納めるので、余分な参考書などは、買う事は考えも出来なかった。

しかし、学校での授業だけでは、全部理解出来ない「数学の解析Ⅱ」など、復習しなくては、と思う様になっていった。

家に帰って母に聞いても、「そんな役にもたないことは、学校で先生に聞きなさい」の一点ばりで、参考書が有ればと思ったが、言い出せなかった。この解析Ⅱの諸問題が、判れば、物理の問題も解けるのにと、思つて悶悶として居た。

有つたのである。ある日の夕方、賽銭集めの重い引出しの中に（賽銭は下の引出しに集まる様になっている）、手あかの付いたうす汚れた算数の参考書が、投げ込まれて有つた。パラパラとめくると、今学校でやっている解析Ⅱの問題の例題が續いており、暗くなる迄読み進んでしまった。受験生がとことん、勉強して、これで良しと、お詣りして神社に納めたと解釈し、私が使わせていたゞき、期末の試験に、

先生から「このクラスに一人このむつかしい問題を解いた人が居た。よほど、やったのだと思うよ」と言われた。

うれしかった。先に進めないと思つていたサイン、コサイン等、どんどん転開し、クラスのだれよりも判り、数学が、自分のものになつていった。この本は妹達にも教えたが、どれだけ役立ったかは、判らない世界になつていった。物事何でも必要な時に得られれば、忘れられないものであるが、これなど、昔から「御縁」があつたと言う事であろう。この他、昔からの事で確かりと私達に付いている机がある。

小学六年の時戦災で、机も本箱等の学習道具をすべてなくし、勉強は、食事の時の「ちゃ<sup>ぶ</sup>袱台<sup>たい</sup>」が、当り前だった時、母が、思い出した様に「女子師範へ行つていた時の夜、勉強した時、皆んなが、寝静づまつた時に、布団の上にチョット置いて使つた机が、小中台の土蔵の二階に有るはずだわ。あんな小さな机だれも使つてない。もらつて来よう」と言つて、小さく、かるいので、脇にかかえてもらつて来てくれた。バラックで押し入れもない家で、私の女学校への試験勉強に役立ち、妹達も、みなその机で夜おそく迄やり、巣立つていった。

敷布団の上にチョットおき、ねむくなると、すべらせて脇にして、朝又勉強したなど、思えば、母から、

娘達へと續き、今はせがれ、和香健が、東京へと運び生きている。百年に余る、我家の主である。この松井の家には、コタツやぐらが、私が、物心ついた頃より茶の間の中心にあった。長火鉢と共に昭和の頃は、コタツだけが、冬の暖房でみんな、すごして居たのであるが、母が、「このコタツは私が嫁入りした時から、デンとここに有って、コタツ布団の中だけが、ぬくいだけの冬で、すごしたのよ、」と話してくれ、今は私の腰掛けイスになって役立っている。

今の電気器具類は、十年余りたつと部品が無くなると言われ、修理は出来なくなるが、昔の物は、空気の様に当り前に居場所を確かりと持ち納っている。あの昭和廿年の戦災で見わたすかぎり皆、家具、家財がなくなり、特別な小物だけが、居すわっているのが現代であるが、身の丈に余る物量の上に今の人々は押しつぶされそうになっている。

「適当」という事は、むつかしいものらしい。戦後少し、世の中おちつくと、戦前の生活よ、もう一度と願う様で、結婚式もだんだんに多くなり、神前の式も皆希望し、その演出も戦前の様な、式服を着てと夢は広がり、疎開し残された、振袖や紋服等、我が家に有った物は、借りたいと希望が、多くなっていた。

夏の盛り、七月末に結婚した父母の式服は、すべ

て正絹の五ツ紋で皆に嬉ばれた。

その身分に応じた式服は、打掛、振袖、留袖、など、自分で持つのが当り前で、「借り」ですますのは事情の有る方のみ、の考えが、通る時代では、衣料品が、不足の時なので、今有る品で用立てる事になったのである。

始めは、焼け残りの品を皆様にご利用いたゞいて居る事で、過ぎていったが、時勢は、どんどん進み、庶民の多くが、夢を広げて、着たい物を、多くしてゆき、対応する私達も先導してゆき、神社も衣裳部を確立して、単なる有る物を御貸しするのではなく、呉服屋をまかす程、始めは、東京浅草に仕入れに行った。

着物は京都に行かなくてはと、(母や私など)何人か係が、春に行つて、色々な、織りや染を見て注文し、八月お祭りが、終ると、新柄新着の式服を展示し挙式申込みの方々にみていただき、貸衣裳の注文を、とつたのである。

このシステムを千葉で一番早く、とり入れたのが、千葉神社であり、結婚式場が、新たな商賣におどり出て、この世界が、神社界の起死回生になったのである。

この代表格が、明治神宮が始めたところの「明治記念館」であった。国家の手をはなれた明治神宮に



於いて、正月等に日本一の参拜者を数えても、その御賽銭は、二ヶ月程の神宮經常支出でなくなる程で世帯が大きければ、大変なのである。

この「結婚式場」が、神宮を救ったのである。

我が、千葉神社でも、迷う事があると、相談にゆき、見学した。次女松井明子が、短大を卒業した時、「記念館」に出仕し、一年近く学ばせたのである。

我が、千葉神社では、なりゆきのままに「貸衣裳」の部門を神社直営としてどんどん大きくしていった。

戦前と違いこの「貸し物業」は大きく進歩した世界になる。庶民は中産階級となり、夢を広げる、それに応じて、品物を用意してゆく、これで千葉神社は、基礎財産を作ったのである。ただそれには、夢にも見た事のない、税金が、かかって来る。これには、二重帳簿を作りたくなる程な税額で、私の様な算によわい者には、仕事をしたくなくなる程だった。会計をすべてまとめめる高明大人<sup>うし</sup>は、二重帳簿は「以つての外」と言われ、宗教的な、祈祷料、神札料などは別だがと、その処理の仕方は優秀と税務署よりほめられる程だった。

これ等の日々の中、御参拜や、諸祈願の方々が、多くなれば、結婚式の数は減って行って我々も、神社の方向性を変えて行った。

結婚式は、ともかく披露宴は、だん／＼ショーの

様になり私達より遠いものになっていったので、披露部門は、やめて式のみのお申込をうける様にした。バブルは、はじけ世の中、だん／＼落ちつき、神社の方向変えは正しかった。

普だんも祈願が多く社頭での神札代が増えて、税金は、無いに等しくなった。

この頃、神社まわりで賣る不動産があると、戦後、ありとある物を手ばなした分、買いもとめ、駐車スペースとして、整備していった。

神社本殿南側（大日寺境内だった）の地つづきの公園を（約一千坪位）何とか買収したいと努力してみたが、現在はむつかしく、神社と一緒に公共の用に適する場所として、自由に出入りが出来る様になったので買収はあきらめたのである。御縁がなかった、としか、言い様がない。

大正十一年に奉納された石の大鳥居を始め、石造りの物の耐震性を確かりとする為、三年程かけて東側入口は改造される事になり、築山等の良く立派に、そだった樹木は、あれ／＼と思う間もなく切られてしまった。

戦災で一本一草とてなくなり、緑が一つでもあれば、何とか育て様として日々をすごした私にすると、何も、切らずに移植したら良からうに、と思つて苦言を呈したが、今の時代大金をかけ動かしても、神

社は境内いっぱい、植樹してあり、とても無理と言われ、若い人にまかせる事にしたのである。

自分の体は、思う様には動かさず、この様にして時代は移るのだと、観念したのである。

人間、苦勞して一日、一日努力して生きている時は、何とかして、昔の様に、なりたいたいと思うが、時が移り思いのたけを生きられる様になると、又、不安になる様になる。良い事が、つづく、悪い事が不意に来る、と思われる。この為、不測の事があつても、これが、一生の間には、必ず、有る事だ、と思つて努力する。

「人事をつくして天命を待つ」と言う事は、よわい 齢九十才にもなれば、すべてに、満足という諦観がなくてはならない。

身のまわりの人々、物事を、静かにじっくりと見ると、神様は、人間個々に実に良く、ソロバンを平等に付けて下さる。

私達、戦後の貧乏学生に対して、恵まれた学友として、輝いた表舞台を進まれた彼女は、その後で、御主人様の不慮の事故から、次々と身のまわりが、変り、今はどうなつて居るかは、判らない。輝ける表の事が大きいと、落ちこむのが、大きい。私の様に参考書が買えず、神様からの賜り物の使い古した参考書で、大喜びした位の幸せの方が、適当なのか

も知れない。夜なかば中半すぎまで、母と夜なべして、衣服の仕度をした大妻短大での二年間、その間に家の手伝いから始めた、神社への一途の気持、卒業して一ヶ月後の結婚、その後の無償奉仕の日々など、すべて神社、あつての日々で、相談事は母とすごしたので、母が病む事なく突然の死別は、私にもものすごく大きく影を落とし、心身とも、落ち込んでしまった。

何をやるにも、自信がなく、神社の婦人会の中でも、「前の奥さん、だったら、こんなではなかった」など、具体的に言う方も有り、つらい日々が有った。その中であつて高明大人の指導は、すばらしく、人々の中にあつても、自信をもつて進む事が出来た。その「神社一本槍」の私が、家庭に於ける子供の教育で、息子和香健では、何とも言葉に表せない苦勞が、わいた。

松井家では、女子は授かっているが、男子は後にも先にも、たった一人しか生れなかった。

「神社の和香ちゃん」と呼ばれ、どこへ行つても大事にされ、小学校では受持ちの先生からも「まづもつて、今迄の児童の中で、まず第一の出来です、」とおあい相いする毎にほめられて、一家一族の希望の星として育てられた。

それだけに乳児の頃の健康には、父母、祖母と、

それは、それは大変だった。

ミルクで育てたが、夏の暑さが、たえられなかった様で、日中は、良くミルクを、はいて年寄りを中心に配させた。夕方より夜になると元気に遊びだし、ミルクもよく飲んだ。

今思えば、熱中症の様なものかも知れず、冷房の室でもあれば良かったが、日中は体温も上がって来た。水分をどんどんあげればよかった、かも知れない。ピヨピヨして居た男の子であったが、秋口になり元気になって、年より達もホッとして、仕事にとりくめた。言葉の言えぬ嬰兒は、神の子と言われるが、この時、熱も高くなったので、悪い病気ではないかと、脊髄より水をとり調べもした。いたかったと思う。

生命力が有ったのであろう、皆んなの祈りも有って、あとは、丈夫に育ってくれた。

千葉高より大学へ進む時、「神主になるのはいや、」と言いだし、自分は社会へすぐ出る、と一家の希望をことわったのである。この時ばかりは、夜もねられず、何で、あの息子が、神社以外へと心をむける様になったか、と反省もするし、育て方が、間違ったかと、なやみになやみ、私の体調は他から見て、あまりのやせすぎにガンではないかと、心配して下さった総代さんもあった。家の中の事を他人様にさ

つきと言う方もあるが、私には出来ず、苦しみぬいた。

神社は日毎に多忙をきわめて、あとつぎが決って居れば良いが、御先祖にも申しわけないと、日をすごした。

長女玉香も結婚したいと、申出があり、我が家は、まずまず大変だった。

山本栄さんが、一人で挨拶にみえた時、高明大人は言った。

「あなたは、社会人として世に出ている人ですが、この神社界に入って皆様に、神様との仲とりもちとして御奉仕する気は有りませんか。うちには息子は居りませんが、他の世界へ行つて居ります。私は、神社界の生れではないですが、是非に入つてみて下さい」と言ったのである。私はその言葉を聞く程の元気もなかった。何とかして、はなれた息子をよびもどきたいとの願いで頭がいっぱいであった。

すぐには、事が進まなかったが、この言葉で、千葉神社に若い生気が入つて来たのである。

人の世は、良い事、悪い事が、適度に来るものである。人の道にはずれない、一所懸命に生れば、かならず、良い道が、みつかるものである。とつくづく思う今日このごろで、思う様に動かぬ体をなぐさめている。

山本栄家では、この申し出に対し、「一族の中に神佛に御奉仕する人が、一人でも出れば、その一族は救われる」

といわれているので、神社界に入るのは結こうです。息子さんが返って来れば、その時は、その下に入ります。とまで言ってくれた。玉香もその言葉にたまげたが、言葉を切った高明大人が、まず喜んだ。二人の若い人が結婚を希望しているなら、式だけは、神職でない時にまずあげて、それから勉強すれば良いときまり、内々に挙式をすませた。

玉香は、短大を卒業し千葉神社に奉務して居り、そのまま、若い主婦として働き、栄さんは、国学院の専攻科（大学院位）へ進みましたが、仕事からはなれ無給となったので、学費も入用ですので、すぐに働きの道を、さがしました。

二人の住居となった、松井家裏の小さな二階屋の玄関脇の表かべに、中学生相手に、塾をやる、（算数と英語）張り紙を出したのです。それを玉香が用意するのを見て、「そんな事してお客さんは来るのかしら」とまず私は言いました。

第一、はり紙なんかしても、各所にある学校式の塾でなくて生徒は来ないので、と思うと一緒に、思いもよらない事でしたから、なかば、ながめる様な気持でした。

しかし、一回四人の生徒は、少しずつ集って来て、一週二回位で、どの日も四人の生徒は、夕飯後に、本と帖面を持って来たのです。栄さんは、自分の大が、終るとすぐ帰宅し、生徒の指導をする、という生活で、途中、お茶の時間も持ち遠い家の子は、父兄が、送りむかえをするまでになりました。

どの位の月謝をいただいたか、知りませんでした。が、生徒は絶える事なく来ており、高校への進学生も世話し、大変好評の様でして、その子供さんが、勉強に適して居ない時は、具体的に話して、進路を教えたりもした様です。

庶民の親として、実生活に必要でもない勉強を無理してやらせるより、細かく教えてくれる近所の先生の方へ、子供がいやがらずに行ってくれば、その方が良かったのでしよう。これには、何事にも、自信を持っている私も、脱帽でした。

栄さんが、大学を卒業すると、弟の清嗣さんが、續けました。（慶応大生）

それから、月日がすぎ、山本栄、玉香の家庭にも男子が、四人授かり、ご両親も千葉に来ていたゞき八人の大家族になりました。

千葉神社には、四人の上の、二人が奉仕し、下の二人は、それぞれの我が道を歩ゆんで居ります。

松井家も一人息子がつがずに他の世界へ行くと出

てゆかれ、母親の私が、死ぬかと思われる程の苦しみがありました。が、今では、高明大人が千葉へ来た時、さんざんいびり、いぢめた人達も、ひとつも言葉なく、代が替わっております。

今、私は、体が思う様に動かさず、気がめいりする事も多い日常だが、自分が使いたいだけのお金に不自由する事なく、自分の娘、孫と同居し、世話になり、携帯電話で敬神婦人会の方々や同期の友と、愚痴ったり慰めあいながら日をすごし、気の会った家政婦にも恵まれている日常で、元のように体が、ならなくともこの不足があつて、丁度よい位と信じています。

すべて考え方、ひとつと感謝するのが、九十才をしてやつと悟り、たどりついた一生と思つて居ます。

書き終った思いを、読み直してもっと、じっくりと深みのあるものにしたいが、いくら書いても、満足するものにはならない。私の死後、昭和に生をうけ、千葉神社に一生をかけた一人の女性の思い出して、讀んでもらえれば、満足である。

これに加えるには、母、「松井なつ」の信念を、もっと書いておいてあげたい。表には残らないが、私を育てたのは、「松井なつ」、「その人である」。

どの時代も、女性の力は、偉大であり、その業績は、子供によって花ひらくものである。松井家もその意味では、女が多かったから、これだけの繁栄が出来たのである、と信ずる。

令和五年七月卅一日

松井清子、

松井清子

# つれづれに

## 三部

〔誕生日 歳を重ねにやっつて来る

氣を研ぎ澄ます、おこな 媪 目がけて、〕

R 5 . 8 . 1 .

昔の日々、の思い出を書こうとすると、ふと思う間もなく何十年も前の事で相づちを打つ間もなく、友も居ない事に気付く。でも今しか書けないと、ふるいたちペンをとる。

昭和十二年位か、支那事変もおこり世の中は大変な方向に進んでいた頃、私は遊んでくれるお姉さん方の御家へ朝になると毎日の様に出かけ、その家の様子をじつとみている事が、すきだった。

我家の隣りは、「有吉堂」と言う漢方医の病院であつたが、その時は医者先生はなくなられた後で、大きな門と玄関には、薬を、もとめに来る客位で、石造りの二階建ての表建物と奥に座敷が、いくつも有る、大きな御屋敷だった。

隣の神社弁天様は広い池や、藤棚の中に御社殿はあり、池へは滝が静かなせゝらぎを、たやさぬ、景色で、チビの私も、この奥まった庭は、好きで、有吉堂の多くの庭石や、盆栽は、うしろ 背にそびえる、たいさんぼく 泰山木の大樹とその大きな白い花は、いかにも豪

邸の趣きがあり、この様な木を植えたいと思ったものであった。

ただこの御屋敷の人達は、たつたと動かず、働いているのは、奥さんと、女中さん位で、家の四人位居たお嬢さん方は、何もしずに遊びに来た私の相手になつてくれた。

そして、昼近くなると、デンワをかけて、各々好きな物を注文するのである。まずこのシステムは何も判らない私でも、これは大変と、家でのひる飯に帰つたものである。

この浪費的な生活は、当主が強健でお客様が、いっぱいであれば、だめだわ、と私なりに思ったが、支那事変も長くなり、諸物資も、だんだんと、とぼしくなつてこの大きな御屋敷も表の方から順に他人手ひとでにわたり、庭の池がなくなり、奥にあつた入院患者用の長屋も一室、又一つと変わり、昭和廿年の戦災で、すべてが消えていった。

この中で、一番下の娘さんの百合子さんは、男子部附属の小学校を卒おえると、女子商業学校（現在の千葉経済大学附属高等学校）へ進み、仕事を持つ女性として出発していった。

終戦後とはいえ、女子に対する学校は少なく近所の者は、「あの御嬢さんが、どんな仕事をするのか」と話しあつたが、戦後のドサクサで有吉堂の話

しは聞かなくなつた。

大きな所帯が、だんだんと後退し、小さくなる姿を、十年余りかけて眺めた私とすると、小説より奇なりと言われた、ドラマをみる様であり、その場に応じての生活の切り替えは、むつかしいものと、身にしみて判つた。庶民は、それなりに生きてゆく力を持つてゐる。末娘の百合子さんは、年とつた、お母様をつれて嫁に行つたり、色々と苦労されたが、後に学校の先生に嫁とつがれ、女の娘こに恵まれ、今（R5年春）東京のホームに居られ、十年位前に「お茶の水」の病院に入院されて、「神社の清子さんに会いたい」との言葉にうながされ、私は孫と一緒に、シルバーカーを押して「お茶の水」の駅へ行き、あの階段を車を孫娘にかつがせ、一人手すりをたよりにぎつて、駅近くの病院へ見舞に行つた。

昔と変わらず、美人で体型も確かりとして、言葉を交はし、持参した、黄色の（香り高い）フリージアに、あの頃の事を想い出し、写真をとる事が出来た。（今年R5年7月になくなつたと聞いた）

神社隣地だつた有吉堂の土地は、まわり廻つて今、神社駐車場になつており、昔の事を知る人が来ても、見当もつかない、変り様である。

戦中より始つた隣組のお仲間も、今はだれも居らず、話す事も出来ないが、皆さんが、「神社が、こ

ここに有るだけすべての始まりが判る」とおっしゃっていた。けるので、私が生きている事の大切さが身にしみて思い知った。

戦争中迄の巫女舞のメンバーが、この百合子さんと、小川八重子さん、高橋ラムネやさん（旧姓）等が、父松井眞澄大人の病床に、お見得になった事がある。戦後もおちつき、やっと皆、昔話しが出来る様になっていたが、すぎた日々はかえって来なかつたと、私には思えた。

その中の、小川八重子さんは、東京で洋装店をひらき、私の様にスタイルの良くない人にも、色々と、アドバイスをくださり、御主人を早くなくされたので、神社での巫女舞の頃を心からなつかしがられて、皆さんに、よく声をかけられ、中心になって来て下さった。

その昔、わがままなチビの清ちゃんに一番相手して遊んでくれたのがこの八重ちゃんだった。

情が深く事あるたびに千葉での小学校の友人である市川建具店夫人を、たずねられ、二月十一日の紀元節（建国記念日）の日に千葉の私達をたずねて話しこまれ、次の日、散歩から帰られ、ぼったりと一人天国へ、旅立ってしまった。

あまりの急の知らせに、私も、ただせくままに通夜にかけつけ、東京目黒の葬儀式場近くに一人宿を

とり、泊りこんだ。

通夜の時は、親族、友人など、多くの人々で思い出を、話しあつたが、次の告別式の日の事が忘れられない。

その日は午後の葬式であつたが、その控室の中央に、大きな机があつて、アルバムからはがされた写真が、山のように積まれており、脇に「母八重子の思いがいつぱいの写真です。皆様ほしい品がありましてらどうぞお持ち帰り下さい。残った物は、御棺に納めてまいります」と書かれてあつた。私など、千葉での知人は、その山のような思い出の姿に、息をのみ、昔の喜々とした姿の何枚かに、手をのぼし、八重ちゃんとの日々を、いたゞいた。

私の様に戦災ですべて失ってしまった者には、焼ける前の神社の様子や、女学校での楽しそうな制服姿は、声を出して話しかけられる様で、八枚程と、戦中に新たに発表された、八重ちゃんが舞っている「浦安の舞」のアルバムをいたゞき、火葬場へもゆき、埋葬する墓場にもお供をしてお別れをして来たのである。

あまりにも急に、次々と、永久とわの別れの行事がつづき、御葬式のやり方を考えてしまった。急な事だったのに、息子の嫁さんや、娘さんなど、お母さんが一番好きだった写真を、その親しい方々に、自由



に選ばせて、残った写真は、そのお母さんのお供をさせて一緒に旅立たせた事など、素晴らしい事と思いい、我が家の父や母の山の様にあるアルバムを眺めたが、手が出せなかった。

八重ちゃんの御遺族も咄嗟とっさの事故、出来たのではないか、と思ひめぐらした。

あの戦争で一本一草とてなくなつた私達は、何でも思い出の中にある物を、確かりと残すのが、生きがいと思つて生きて来たので、どんな、小さくボケタ写真でも、これはだれ、何の時なものと、残すための手段にしてしまう。始末仕様としてもかえつて収納してしまう、量は増える。

写真ばかりではなく、その人が大切とした本や、着物類、(洋服やコートなど)その時、その場で、お安やすすくない価格でもとめ、その行事に使つただけで桐箆たとうしに納っている、畳紙たとうしの中の着物がある。それには、帯も一緒にあり、その価値の判る人になら、ゆづりたくもあるが、手が、つけられずに鎮座している。

私の御棺の中での着る着物は、用意してあり、娘達によく話してあるが、一番始めに母に買ってもらった大島であり、古い物である。又夏だったたら、母の嫁入りの時の紗の白地で。百年近くたった物である。

自分の葬式は、自分が好きな様にしたいと思つているが、こればかりは、喪主にまかせるより致し方ない。

ただ当り前に葬式をだし、御みえいたゞいた方々に確かりとした御挨拶をして、五十日祭をし、お返しをしていたゞかなくては、うかばれない。

昨今は、何事も簡略にする様になつたが、普通にすれば、眞違いはない。

コロナのあとは、すべて変り、ある種の軽るさが大手をふり、味けなくなつた。今の私は、体調に不安があり、外出が思う様に出来なく、テレビで、山や海、外国の様子等を見て見聞を広めるだけだが、これも一つの世界と思つて、時間のゆるすだけ見て、なぐさめている。

## 「ひと とのまじわり、」

色々なグループがあつて人々と交わるのが、世間であるが、子供が居る家庭は学校での保護者の集りが、かならず有る。我が家は四人の子が有るだけ、各学年に御仲間が出来た。上の三名は、いつも下の子が背中にあり、若い親だけに仕事が次々と押しかけて来て外へむかうお仲間には失礼した。

四人目の末娘の時に役員が来た時は、のがれられずに、学年の委員長をうける事になった。

小学校六年の時は、学校へたび／＼呼び出され、色々な仕事を先生をまぢえ、役員諸姉とは親しく学校行事に協力して卒業の日をむかえた。子供が同年というだけで、一緒にやったのであるから、親の年令は幅があり、意見も色々で、むつかしい事も多かったが、楽しい日々でもあり、このまま左様ならはしたくないと、子供達が卒業後も一緒にすごす日を持ちたいと、毎月一回集まって、積立て貯金を始めた。場所は、千葉神社の和室で、各町毎に当番をきめて、中食を作り、一緒に物を食べ親睦を深めていった。

子供達も高校、大学と進み、母親が年に一回旅行

に行くのには、家族の人々も同意され各町毎のグループ（五、六名位）が、計画をたてて、始めは、近くに一泊であったが、だん／＼に遠方に広めて二泊、や三泊となつていった。

旅行に参加、不参加は、別として積立ては各々、續けて、金額は、まとまってゆき、日本各地へゆる程の、グループ旅行になった。

「葉桜会」が、その固有名で、メンバーの人数は、減つたが、それなりに續いたのである。

多忙な仕事を持つ私などは、催行日があわず、なかなか同行が難しかったが、北海道、九州、中国地方、紀州、伊勢、長野、等、よくぞ廻つたと思う程、あちこちを十名程以上で、お詣りして、見物して、歩いてまわつた。院内小学校六年を卒業した子供も、世帯を持ち、その子等も結婚する迄となり、年月がかさみ、親達も体が自由ゆかぬおおな媼おおなになつて来て、メンバーでも死亡する方が、増え、ふり返る日々となつた。（始めから、四十三年余續いて、昨年解散したのである。）

単なる女性のグループでは、出来ない程の日々と知友の持てた事、幸せであつた。

いそがしい、せわしいと言いながら、私は良く広く友が居り、他家に嫁よめにゆきもしず、知人友人と、広い交りがあり、幸せである。現在体調が、外出に

むかなくなつた時点でも、すぐに言葉をかかず事が出来るのは幸せである。元気な頃は、一日に三ヶ所位の会合には顔を出して居たのである。

又、神社に奉仕の日々であつたが、母も良く仲間を作り、外へ出ていった。最初の日が、「七日」であつたので、会の名も、「七日会」として、始めは各家で食事会をもつたが、外部への日帰り食事会となり遠くへの旅もする様になつた。

年令が、母が一番上で、そば屋の春木屋の宮原さん、染物屋の大阪屋さん、写真屋の丸山さんの四人は、気があつて、ずい分と續いたが、我が家の母が、急逝し（五十年たつ）、娘の私が續いてその会は、存続した。しかし、年月がたち、春木屋さんが逝き、大阪屋さんが、病み、なくなつて、丸山さんと私松井清子が、動けなくなつて、活動する事は終つたのである。今、このペンをとつて、何事でも時の移りには勝てない事を知る。

## 「家族の思い出」

自分が中心となつて世が移つていったのが、何としても、思う様にゆかなくなつて、次の時代の人々に、活動の場を、渡すのはいたし方のない事を知る。これも人の世の常である。

戦災後のつらい、悲しい日々が續いた時も、母は、「農家の働く女性」としての姿を失う事なく、私達娘や、夫の虚弱さを励げましてくれた。どんな時も母が確かりとして仕事をして居るだけで、安心して私は日をすごす事が出来、前へ進めた。ただあの住む家も小さく、その子供達は、よく病氣もして、生活がみだれた。戦後の食べる物も乏しく、金もない中で弟、「芳雄」は、松井の家に生れた。

産後の十分な肥立ちを待たずに母は仕事をしたが、私など、どの様に手助けをしたら良いか、わからず、弟芳雄の世話は良くやつた。

私は高校に行き、妹明子は小学校五年。末の妹澄子はやっと一年生位の時でもよく子守りをしたと話していた。

女の子ばかりの家にやっと授つた男の子ゆえ、皆んなに可愛がられて芳雄は育てられた。

色白でせんが細かったが、片言で何でも言っただれにでもよく懐<sup>なつ</sup>いだ。五月の初節句に我が家では、始めて「鯉幟<sup>こいぼし</sup>り」を建てる事が出来た。嬉しかった。大塚頭らが早くから、準備し、青空のもと元気に鯉が風をのみ泳いだ時は、戦災後で何もなくなつた我が家に、生気が生れたとその下で、幟<sup>ぼし</sup>り柱にだきついたのである。これぞ男の子の印しと思つたのである。

そのあと、杉田千世伯母さんが、泊りがけで来た時、朝食前に、ひよいと手まわしでおぶい、ぐるりと神社をまわり、私に「芳雄ちゃんはおとなしく、ここのお父さん（眞澄大人）の小さい時に、素くりだわ、なんて可愛いのでしょ、」と、しばしだいて話しこんだほどだった。

ひる間は姉達三人は学校、父は神社、母は空地进行しての畑仕事と、だれも居ないと家で一人遊んで居り、まわらぬ口で、「おかあーちゃん、おかあーちゃん」と泣く様に呼んだそうである。「子供<sup>こども</sup>守<sup>もり</sup>」とて居なく、可あいそうと思つたが、それが、その時の生活であつた。

その弱々しい芳雄は、「脱腸」があり、やつと体力がついた頃に（夏に）手術をした。しかし、腸が、正常には育たず、その秋の七五三の御祝い日のあと、十一月十八日に、一日の間に急変し「腸捻転」で死

んでしまった。

朝いつもと変らなかつたが、ひるすぎ急変し、応急に手当てしたがだめだった。

バラックの間で葬式をして、大塚頭が、木車を引き、姉の私が、付きそつて、桜木町の火葬場へ小さな体一人、棺は淋しく行つたのである。

子が先に死んだ時は親は門おくり迄とは、この時、始めて知つた。親をおくるのは子の役目で、親より先に旅立つのは何よりの親不孝との思いからで、あろうか・・・。

小さな骨壺を確かりとだいて帰つて来た。

親も姉達も居ない墓へ芳雄一人を葬る事が出来ず、百日程、家の中でまつり、今も御命日は、姉の私達清子と澄子が、墓詣りは、かかさず、行つて、当時の語りをし、今は、父（四十年祭）や母（五十年祭）と一緒に、さみしくないと思つて、写真と一枚もない戦後の我が家の小さい弟を偲び、これが人間の出来る、最上のやさしさだと思つている。

その当時の人々と語つて思い出してあげ様にも、ぐるりと見まわし、一人とて居ない。

昔は、どこの家でも兄弟は五・六人は当り前だったが、幼児の頃に死亡する事が多かつた様で、我が家も六人の子が居たが、生れてすぐ死亡もあり、私達三名の女児だけが、成人したのである。

この芳雄のみが数え二才で他界し、厄年の三才、五才、七才の神詣りも出来なかった。せめてこのつたない「徒然」を目にした方は可愛い男の子が居た事を知ってほしい。

現在の日本は、世界的長寿の国として名を挙げているが、そのかげで、昔はなかった歪みも生れてい

る。それは、この世に生をうけ、親より、語り見られる事もない様な、大きな深い愛情をうけて育てられ成人したのち、年を重ねた親の面どうをみるのが、昔は当たり前だったが、家という型が、こわされ、個々の生活が、源となった今は、すべてお金で始末をつける様になって来たことである。体が、少しでも動くうちは良いが、毎日、用意しなくてはいけない食事の算段が、まず出来なくなつて、一日、一日が、どうしてすごしてゆけば良いかが、判らなくなる。毎日飛びまわつて居て、活躍してだから、たよりにされた人が、人が変わった様に、なる。など、ずい分と目にする様になって来て、家族の方から「今迄の様には、御つきあひも、むつかしいので、ホームに入ってもらいました」と言われて、途惑う事がある様になつた。

ホームに入り、三食時間毎に食べて、仕事はなく、ポーツトして居れば、だれでも変になる。まず、顔

の表情が、なくなり、過去の事が、忘れられ、話しが、續かなくなつて来る。家族が同居し、家事的雑事に追いまくられていけば、ボケルひまはない様に思えるが、むつかしい事である。

どうやら、子供が親を看るのは、少なく、金のかかるホームへ預けるのが、今流行になつて来てい

らしい。ひと昔前は、高額のホームへ入れば、すべて事足りると思つていた様であるが、それもある程度、自分の事が出来るまでで、ベットから、自由に動けなくては、みな同じらしい。新聞公告で老人ホームの様子をみると、この世の天国かと思う様な写真と案内であるが、親しい友は、「松井さん、皆んな同じですよ、実の娘とケンカしながらすごすのが一番です」とデンワをくれる。私はその三女に同居して、すごし、体が思う様に動かぬ事をなげいている。

この「つれづれ」にも書いて居るが、私共松井の三人の娘は、知能、体力、ともに確かりとした母のもと、生きて来たのであるが、時がたち、生活の場が違つて来て、日々の生き方が方角的にはなれていった。長女の私は、神社と共に動き多くの方々とも御つきあひが、ふえていったが、暇というものがなく、はやりのゴルフは御縁がなく見学する事もなくすぎた。妹二人はその主人の地位が上がると共に、

ゴルフの世界に深く入り、その方面に練習する為に自動車も習い始め、遠方迄出かける様になった。

すぐの妹、明子は、ゴルフ場での社交も広くなり、皆様に、松井の妹だと知られ、「お姉様は可あいそうですね、ぜんくこの広い自然も御存知なくて、仕事ばかり」と話題になった事も、他所様より聞こえて来る程だった。バブルの盛んな頃は、各所より、御招待があり、今週はこちら、次はあちらと、それはくいそがしい様子だった。仕事のバリバリ出来るその主人（夫）は、次回の株主總會では、専務、いや社長と聞える程になって居た。サラリーマン社を勝ち進むのは、生易しい事でない聞いてはいたが、そのゴルフにかける気力も大変な事で、県内で最高の「袖ヶ浦ゴルフクラブ」の会員にもなったと、聞かされた。

私は何も判らない事だらけだったが、その株主總會が、近づいた頃、体調が思わしくなく、精密検査の結果、内臓にガンが有るのが判ったのである。やと昇りつめた役職に付くか、辞退するか、は、本人の決める事として、私など静観したが、大変な事だった。結果一日も早く切除した方が良きときまり、東大病院で治療が始った。

私もその切除に立ちあつたが、何も判らず、ガンは、切り取る事が最上と知らされた。

又、その会社の代表役員は、代々、仕事なかばにガんで倒れて居られるとも聞いた。責任ある方は、それ等のストレスが、大変なんだと判ただけでも、この事は、私に勉強になる事件だった。

そのあと、病いはさっさと治らず、あつち、こつちと悪くなり、若い時の活動の裏がえしの様に、病院を、転々とした様であつた。

その間、病人は妻である妹、明子に、毎日の様に入院病棟に通い、看病させた様である。私などには、話しては、くれぬので、何も知らない日々が、あつた事が、後日判った。

会社で若い社員など、どんどん動かした日常があつただけ、きびしいもので、下の妹澄子から、「今の病院は完全介護なのだから、そう毎日病院にゆかなくとも、良くは、ない」と言つてあげた程だったと話してくれた。

小康を得て退院すると、自宅での看病は、もつと大変で、食事は、細かく注文され、食事の仕度は、どうすれば良いか、が判らなくなつていった、らしい。病人の思う様にゆかぬと、怒鳴られる毎日に、他家に嫁した娘達が母親を医者に見せると、カルテに、「アルツプアイマー」と書かれてあつた、そうである。

二人の娘は、立ばな主婦として一家をなしている

ので、このままでは両親ともだめになると、それぞれに室をとり、ホームに御世話になろうと、決め、自宅近くに新築間もない施設を見つけた。

これでどうやら良いと思っただが、このホームに入っても妻明子は別室のダンナの世話をしに通って行った。

夜中のお便所の世話等、「やらなくとも良いのです」と言われても、泣いてやりますと、つづけた様であり、食事の時など、怒なるなどされても、一所懸命にやっけて居る有様だった。

アルツプアイマーの様子は進み、可愛そうで見えられないと、娘達は、女親だけは、別の施設にしないでと、転院させた。

それ等の、こまり事は、いつも後から聞くのみで、私など姉達は、どうする事も出来ぬことで、月一回の面会に会う毎に、だんだん、表情が、変わるのを見とめざるを得なかった。話す言葉がわかるのかも、返事らしい事もなくなり、笑うのか、ともわからぬ表情を、するのが、せいぜいで、ついこの間まで、ゴルフに行つての様子など、うれしそうに話して居た姿が、<sup>まなこ</sup>眼にしつかり残っているだけ、言葉にならず、<sup>やまい</sup>病とはいえ、何も施す、すべのないこの病気の、わからぬ深さを思つたのである。

ただ気ぜわしく、休む間もなく、こまごまと世話

し、怒鳴られる、日常で、始めは、正面からそれに応じ様としていても、体が、ついてゆかなくなつて脅<sup>おび</sup>える様になると頭の方が、働かなくなつて、しまう。つまり対面する力が尽きてしまふ。元気だった妹を知る姉の私には、医学的な事は判らなかつたが、精神的、肉体的過労としか、思えなかつた。さきのホームに残つた、夫の方は、妻が居なくなり、<sup>あご</sup>顎で使い怒鳴る事が出来なくなつて、力つきたか、間もなくなくなつてしまつた。

二人の娘は、この両親を二人して一ヶ月に一回は見まわり、本当に良く世話をした。

私は「あなた方は、自分の親だから、その気になれたでしょう、しかし、ダンナ様には、義理の仲なのよ、感謝しても、しても足りないのだから、千葉にゆく時の、御礼の言葉は忘れない様に、」と何回も言つてやつた。

その後、怒鳴りちらしたダンナが居なくなつたら、妹の病気は楽になつて、良くなると、私は思ったが、何の関係もなく、悪くなるばかりで、年が改ると、その後を追つて妹は旅立ってしまった。

三人姉妹のうち、一番の美人で、祖父の龍雄に似た顔立ちで、千葉神社の明ちゃんと言えば、美人で頭脳明晰と言われ、私と同じく大妻女子大を卒業してから、神社の結婚式の勉強にと、「明治記念館」

にもゆき、千葉神社の興隆の一助になったと思っ  
ている。みんなそれぞれに良い御縁に恵まれ、良い家  
庭が出来あがったが、悪い病気が、可愛そうだっ  
た。

しかし、その時々、一生懸命に生きた事に変りな  
い。華の様な月日もあったのであるから、神様は、  
その人、その場を、与えて下さっている。何事をも、  
感謝するべきであろうと信ずる。

戦後のお金も物もない時をすごした者には、何を  
やるにも、節約して、派手にならぬ様に、きちんと  
した事は、する様にした。

これは、神社復興としての結婚式等、地味にして、  
あげるのが第一と考えてお世話してゆき、皆様に喜  
ばれた。

まず、結婚式の式服を、新たに買いもとめるの  
ではなく、持っている方より「借りる」事を皆さん  
にすゝめた。戦災で焼け出された人々は、嬉んで、  
疎開された昔の振袖で式に臨み満足した。

しかし、時が進み、戦後という言葉も遠くなると、  
個々の思いもふくらみ、次の世代の若者は、自由  
学校もえらび、仕事も多岐になり、家業という意識  
はなくなっていた。

それだけに言い伝えられる話しは、極端にへり、  
すぐこの間<sup>あいだ</sup>の事も知られなくなった。良しにつけ、

わるしに付け、個人情報保護とやらで、住所を聞  
くだけでも大変である。昔からの行事を、大切にす  
る神社、佛閣は影響が深く、跡継<sup>あとつぎ</sup>を決めるのも大  
事業となる。

我が、松井神主家は、この「徒然<sup>つれづれ</sup>」にもおてき  
だが、高明<sup>あき</sup>大人が声に出して、窮状を話し進め、そ  
れに応じた山本栄<sup>あきら</sup>大人のもと、その御子達の進取の  
気鋭に満ちた神職に恵まれている。

これも、千葉神社一筋に生きた、松井龍雄<sup>りゅうしゅう</sup>大人の  
生きかたを守った、眞澄<sup>まこと</sup>大人、高明<sup>あき</sup>大人と、その陰  
での女性達を妙見様が御守りくださった賜物と感謝  
するばかりである。これからは、静かに確かりと、  
一日、一日を生きて御恩に応じなくてはならない。

私は、昭和八年に生をうけ、十二年後の昭和廿年  
七月に、考えても居なかつた戦災で、学校道具から  
始まり、着る物、食べる物、自由に住みなれた、總  
二階の家と緑深い庭や、友達皆んなで遊んだ神社の  
広い境内等、指折り数えたら、どれだけの時を数え  
たら良いか、判らぬものが、消えてしまった。

七月六日の夜、家の防空壕から、祖母をおぶった、  
母のあとを、妹の手を引<sup>ひ</sup>いて、門を出る時、「この  
家とも、おわかれだわ、さあ、いそいで」と母が呼  
ぶのを聞いた時、何んで・・・帰って来ればいいのに、  
・・・と思った程、事の重大性を思ってもみなかつた。



燃え上る火の下をくぐり、やっと田のくろより街が、ごう、ごうと、音をたて燃える景色を眺めても、何も判らなかつた。

焼け跡の廣々とした中に父を見付け、神社の青葉とてぜん／＼ない、木の幹ばかり、によきによきして荒涼とした境内に、たどりついた時も、実感がわかず、涙ひとつ出なかつた。

この一晩で私達は、何もなくなってしまう。と骨身に染みたのは、それからの、照る日、降る日、寒い風の日、等 すべてに、いやという程、襲いかかつて来た。

物心付いた頃より、一人天下で、祖父・祖母に両親の過保護ですごした日々で、気ままに遊んで居た日常が、天と地程の変り様で降って来たのである。

絵が好きで、上手だ／＼とほめられ、画用紙もしめ買ってもらい、静物等も写生し、好きに色もぬった。筆を使い字を書く事は半紙が、なくなると言われたが、私用の紙はいつでも用意され、無駄使いない事に専念し、大切に使用して居た。

戦争が激げしくなり、千葉より疎開しなくてはならぬとなっても、子供の毎日は、隣組の皆さんと一緒にすごせて遊べる等、楽しい事ばかりで、すぎた。

縁故疎開ならば、家に居ると同じだと、母の

生家、小中台の家へ、長女の私（六年生）と次女の明子（小一年）が仕度をして、荷作りし、明日出かけること決めた前日（七月六日〜七日）に空襲にあつてしまった。

子供の時、母親の実家に世話になった父、眞澄大人は私に、「体にだけは、気を付けなさい、親の居ない所へゆくのだから、よく妹の面倒はみてあげなさい。くれぐれも気を付けて」と、細かく言葉をかけてくれた。その時、「極楽とんぼ」の私は、何でもそんなに心配するのかしら、お父さんが親戚に預けられた時と違って、食べるに困ってゆくのではないし、おちついたら、すぐ帰って来るのだから、と聞き流していた。

しかし、一夜にしてすべての、物も、帰る家もなくなつてしまい、七月七日の夜、妹の手を引いて部落の家も何軒か焼けた、おちつかぬ母の実家の小中台の家へ、たどり着いたのである。

疎開するべく用意した物は、すべて焼かれ、二人とも、夏の着替えと。学校の教科書だけは、背中のリュックに有ったが、逃げる時に着ていた服の他、冬の防寒用のオーバーと運動ぐつだけだった。

母とどこまで一緒だったか、思い出せないが、母は腰の曲って自由のきかない祖母を、何とか横にしてあげたいと苦心し、院内小学校前で焼け残った、

藤代家に、助けられて居た。石橋の伯母（母の姉）が、藤代様と親しくさせていたゞいただけの御縁であつたが、この御宅で祖母は市原からの迎えの牛車<sup>が</sup>来る迄の二日程、生気をもどす事が出来た。この事は、母が、いつでも「嫁として、あの火災の中、おっ母<sup>か</sup>さんをおぶって逃げて、二晩横にねかせ、市原へ疎開させられた事、本当に、ただただ、うれしかった。もし大変な事になっていたら、と思うと、」と言つていた姿は忘れられない。母が、三十九才の時であつた。

私もその三十九才の時、子供でもない大人を背負う事を心みたが、腰がたたなかつた。

母のその時の心意気が、行動としてあらわれたものであり、私の心にきざまれた事である。

私は、その一夜をさかいとして、焼け出されとして、世話になる身となつた。

あこがれて居た、千葉高女へも合格し、小一時間も歩き末広町の木造校舎へ通学した。

戦中に青年学校として建てられたその建物は良く出来た物だったが、半分は、本町小学校が使い、間借りの学舎は、院内小と同じであり、県下各地より、選びぬかれた学友は、戦災とは無縁の人々だった。

帳面、筆箱を始め、鉛筆、消ゴムに至る迄、軍隊の払い下げ品を利用して私達は、この学級での

毎日に途惑う事が多かつた。

十分に持つていた、種類のちがう鉛筆など、私には、もうなく、夢みる様な絵を書く事も出来なく、講談社の絵本が（一冊五〇銭）その時の絵の世界だけに淋みしかつた。すべて焼けてなくなつてしまつた。

木更津の八剣先生（神職）から、妹との二人に硯箱一式と、紙や、筆と墨等、戦災後、すぐ見舞としていただいた事は、うれしくて、良く使つて勉強したものである。

大雨が降り、雨ぐつとてなく、母の高齒の古るい物で、びしょぬれになって学校まで、辿り着いた事も忘れられない。私などより、倍近くを歩いて、いた方も有り、現在と違う戦後は、皆さん大変な思いで、勉強したのである。

戦後の物資のない時代も、追いおいに変わりお金が有れば庶民も手にする事が可能となつた。しかしその御金は、なかなか我れわれには、遠く、現金を出さなくて良い様にする為、自分で工夫して自作する事が、我が家は当り前で、私や母は一緒に夜なべは外の道を通りがなくなる迄、毎日やった。<sup>ほころ</sup>綻びを繕<sup>つくろ</sup>ったり、寒さにむかう為、裕の着物を仕上げ様と、はだか電球の下で励げんだものである。

その時、何をやっても、前の様（戦前、）に早く

なりたい、ならせたいという願いがあつた。

神社本殿が落成し、社宅が、何とか恰好がついて来た頃も、昔の姿には、まだまだと私には、夢は遠かつた。

詰まり私は、昔の夢を追って、一日一日生きて来た様であり、努力を重ねている人生と思えて来た。だから、昔の親しく、やさしい人は、皆、若くて元気にとして居る。

自分が年令としを重ねてゆけば、皆さん同じである故に、まわりの人も老いてゆく、その日々が、お穩かである事を願うのが人の道であり、諦めも、その潤滑油であり、必要になつて来る。

この思い出の記も、昔を語り残すことにより、若い日の活力を掘りおこす事で、今をなげ嘆くより、すぎた日よ、元気にもどつて来る様にと、拙つたない筆を起したのである。

令和五年八月十二日

(お祭りを前にして心せくままに、机の前にて)

松井清子 (九十才)

松井清子

# つれづれに

## 四部

### 祭りの風景

R 5 年

神社で生れ育った者になると、その思い出はまず、「お祭り」である。

この「つれづれ」でも前に触れているが、私の四、五才の頃の八月二十二日の夏真盛りの夜、チビなりに行ってみたい、人の出盛りの様子は、心踊るものだった。

夏の盛りに千葉神社の祭りに皆と一緒に参加する事は、今も昔も変わらない、わく、わくして、一緒に仲間だと思っただけでうれしく、あと後、先きの事など、忘れてしまふのは、いつでも祭りの醍醐味である。

千葉町よりはなれた農村の小中台で生れた母など、千葉に遠縁の親類が有っただけでも、暑い中、神社へお詣りしその親せきをたづねる事は、嬉しかったと話してくれた。サーカスや芝居小屋など、のぞく事もなかった、であろうに、と思ったが、人の集まる所へは、皆、行ってみたいものである。

毎年変らぬ事が、續いた祭典行事も時の移りには、色々の影を落して行った。

皇紀二六〇〇年（昭和十五年）を記念して、

昭和天皇御製の和歌に、舞姫による「浦安の舞」が新たに作られて全国神社で奉納される事になった。千葉神社でも、十二単衣にちかい枚数を重ねる、衣裳や、垂れ髪で後ろに長い髪や前飾り、広袖で裾をひく姿など、夢みる様な仕度を準備した。その舞姫は、町内を代表するお家のお嬢さんで、私が覚えて居るのは小川八重子さん（院内）森川けい子さん（風呂屋さん）大塚けい子さん（有吉堂）高橋益枝さん（要町）などであった。先生は、東京よりおいでいたゞき、伴奏は、琴の先生を、御よびして、伶人が唱和し「浦安の舞」はお祭りの祭典で舞われ、續いて、神樂殿で氏子の方々大勢に披露された。

御製「<sup>あめつち</sup>天地の神にぞ 祈る朝なぎの

海の如くに 波たゝぬ世を」

みんな、平安の世のお姫様の姿で、観ている人々の溜息が聞える程、素晴らしかった。

それは、戦争前の華やぎのひと時であった。

この「浦安の舞」は、明治神宮、靖国神社等今でも舞われている。

次の年（昭和十六年）十二月には大東亜戦争が始まり、すべてが非常時と解され（昭和十七年か十八年）御神輿の巡行も今迄と違い、市場町の神社御仮

屋に行く事も許るされず、（道路に出られず）神社境内に、白木で今年だけのお仮屋を造って、境内だけでお勇めをした。しかし、御奉仕の選士の顔ぶれは、出征する方が、各町毎に一人又、一人とふえるので、変ってゆき、その顔付は真剣そのもので、御神輿様にさわれるのは今年、この時のみと、子供の目でも判り、その心情が伝わり、声をかぎりに歓声を上げて励げましたのである。

廣かった神社境内も、一年毎に戦争体勢に入り御神輿も遠くなつてしまい鉄製の物は、日清、日露戦争の献納物も境内より消え（お国に献納され）神社での備品である、神鏡や、神殿内の「龍の玉とり」や、鯉の漕登り等の彫刻は、すばらしくとも木で造られた物だけに、疎開する事を考えるべきであった。が、御神輿の御鏡を動かす事でいっばいであった。つまりだれの頭にもすべて焼けるとは考えもしなかつたのである。毎日ある空襲も、空襲の警報が解除になれば、もと通りになれるものと、思つて居たのである。

その上、移動する自動車も無く、広い境内には、神社備品の防空壕がなく、町内用に大きな物が二ヶ所あっただけである。建物は各々はなれて建ち、一度に全部の建物が火を吹いて焼けるなど、思つてもみなかつたのが、本当の事だったのである。

つまり焼夷弾空襲など、我々は、知らなかったのが、本当であった。

空から、火種<sup>ひたね</sup>が、バラバラと数知れぬ程、降って来て、油も一緒に降って来たのである。

「花火」など、見た事もない、子供の私達は、一瞬その落下の景色に足を止めた程だった。

暮色の様な闇の中、大型焼夷弾より分れ散る小型弾は、きれいで夢見る様だった。

せまい路地を、火に追われながら、祖母を背負った母の後を、小さい小学一年の妹の手を確かりどにぎり走り歩んだ事は、忘れ様にも、昨日の様に覚えている、のである。

火のない方へ暗い方へと進み、田ぼの中「ガンガラ松」のもと、小さい祠があり、水門があり、ささやかな水の音を聞き脇の田の畔<sup>くろ</sup>に母は、祖母をおろした。

前の田の面は、早苗が、のびており水も一面に張られ、空からの焼夷弾にも安全と思われ、ほっとして、逃げて来た方角を見て、どん／＼燃えている街を見たのだ。私達の家が燃えて居るとは、とても思えなく、東の空が明るくなったら帰ろうと思って居たのであるから、現実を見て事の大変さを、それから味ったのである。

この時安堵した田圃は、二五年程たって私達三姉

妹が所有する事になり、私は庭木を植えて、緑をふやし、梅の実を多く産し、皆様におくり喜ばれて居るのであるからものめぐりは不思議なものである。

農家に生れた母は、松井家が、不動産が、一つもなく、戦後の様に変動の激げしい時苦勞するのは、大変と、多くの知人に、頼んでまわり、御縁があつて、六百坪近くをもとめる事が出来、二人の妹は、アパートを造り、妹明子が、アルツハイマーの難病で長く病氣をしたが、心配なく療養する事が出来たのである。

この土地をもとめる時の金は、銀行から、借り入れ、自分名の働いた金より少しずつ返して行つたのであり、今は固定資産税を拂って樹木の緑を楽しみ、梅を漬けて老後の楽しみとし、なき母に感謝して居るのである。

昭和廿年七月の戦災の日より、今年は七八年になるが、何度思い返しても、この年月は、母「松井なつ」をはずしては、考える事が出来ない。

災害と言えば、ここ数年、異常な暑さと言つて、毎日の気象予報はただ事でない事で、外へ出ないで、涼しい建物や、屋内に居る様に言っているが、戦災後の千葉の街は日陰になる樹木や、建物もなく、夏の暑さはものすごかった。つまり、夏は暑いもの、冬は寒いのが、当り前の時代、どこへ隠れるわけに

もゆかず、日中用足しに出るには、自動車など望むべくもなく、良くて自転車、リヤカー、物をはこぶに、馬車、農家は耕作に使う牛車位で、すべて体で事を、なしていた。

戦災後、我家では、末娘澄子が、赤痢になり、すぐ千葉大学の伝染病棟に入院となった。病人はすぐ焼け残りの病室に入ったが、必要な諸器具は、家で用意し、持ち込まなくてはならず、今と異なり、入院は大変だった。

都川を越えた先きは、戦火をまぬかれており、昔風の家屋は風鈴も鳴り、<sup>すだれ</sup>簾がさがり日を除け、風が通っているのがみえた。

いろんな荷物を大風呂敷に入れて背負い、大学病院の坂を登る時、「ああ暑い、この町（亥鼻町）の人は、幸せだわ・・・」と横目に見て、羨しかったのは、今も暑さが来ると思い出す。その病院前の家並は変わらず、大病院は、庶民に、今も安堵を与えている。

この様な時、病人に付いて居る母の指示は頼もしく、荷物をはこぶだけでなく、留守の神社の事、家での食事の仕度など、すべての事が頭の中にあり、私など、学校の事、宿題などでいっぱいの時も母の言葉少なな表情を見れば安心出来たのである。

神社はきまっただ行事は動かせず、進ませなくては、

ならず、急な病人の出る事が一番大変であった。この澄子は、小学校へゆく前の夏今度は、「疫痢<sup>えきり</sup>」になり、又又大変で、親戚のをば達にすぐたのみ、「法定伝染病」の澄子を看病したのである。体は小さい方であったが澄子は生命力が有った事も幸いして、元気になり、千葉大の附属小学校へ入学出来たのである。

母、松井なつは、私達娘はもちろん、父を始め神社事すべてに中心として活動し、その存在は、そこに居てくれるだけで安心させられる人だった。

昔（戦前）の神社は、女はお詣りは、良いが、神社の中に入って、掃除や行事に参画する事など考えられなかったが、戦後は、女性の宮司さんまで許される様になりました、千葉神社も、結婚式で復興する事が出来たので、その陰の実行力は女性だった、と言う事は、だれの目にも判っていた事である。我が、松井家はその女の子だけ三人居たのであるから、早くから戦力となり、千葉神社の基礎はきづかれたのである。

長女清子は、小学五年生位から、筆を持ち、上手ではないが、臆する事なく、祝詞<sup>のりと</sup>を始め、結婚式の御二人方の、のべる誓詞<sup>せいし</sup>も書いた。つまり、数が多くなく、印刷する程でもない物は、どんどん筆が一番早くて、見本の文章さえ、有れば「強い<sup>こわい</sup>もの知ら

ず」で手伝ったものである。

その時、母は、私は、筆で書く事は馴れていないし、字は単なる記号と思っていたからだめです、と言つて、娘達には、早くから、筆や半紙を与えて、お習字は親しませてくれた。

神主の娘は、人様の前で、サツサと書いて当り前と、私達も思つて居たから、育てる時は大事である。現今の神職の子弟で、大学を出て新たに奉職して来た若い人達に毛筆で仕事をたのむと「筆はだめです、書けません。筆字の様な書体の印刷が有りますから、大丈夫です。」と答えが返つて来る。

神主の子で、毛筆はダメと言う返事をもらうと、本当に残念で仕方がない。一番そばにある筆一本で、何でも書けるのに、と思うのである。

ただ寺の子は必要にせまられ、手伝つて書いてるので、すぐ上手に書いてくれる。

(法事があれば、御塔婆に、その方々の名前を何枚もスラ、スラ書く必要がある)塔婆の板に書くので、御寺での筆は、確かりとした大きめの筆が、常用さ  
れている。

「弘法(空海)は筆をえらばず」と言われるが、下手な者程、良い筆を使わなくてはいけない。

松井高明大人は、書道を習いに行つたわけではな  
いが、見た者が、<sup>すがすが</sup>清<sup>すが</sup>清しくなる、きれいな筆字を

書き、ペン字もていねいでだれが見ても判る紙面だと感心させられた。

何事も、その必要にせまられ、努力すれば。それなりに上達するものである。高明大人の生活は、その向上心で神社での日々が有つた。私の様に外の世界を知らない者には、まばゆいばかりの事が多かつた。

一家一族の中心であつた母は、常々、いそがしい娘達の日常をみて、健康こそがすべての基であるから、私は病んで床にふせる事なく、旅立つてゆきたい、と言つていた。それは、だれでも、望むところであるから、当り前として私達は聞いていた。

高明大人は「毎日、願つて居れば、妙見様は、かなえて下さる。まず信じて願う事」と教えていたので、娘三人とも、元気で働き病みふす事が無い事を願つてすごした。

神社の仕事は、日に日に多忙をきわめて、高明大人  
の母親、横浜のお母さんに千葉に来ていたとき、子供達(上二人、玉香と和香健)は、小さい時から、ずっと良く面倒をみていただいた。横浜のお母さんは、働き者という言葉が、この人の為にあると思う程、休む間もなく、さつさと動き、神社の職員とも、親しくして居て、(十名位住込みがあつた、)私達の仕事に、後顧のうれない様、陰げ日向なくささえ



てくれた。

お正月は、横浜に帰り、ゆっくりすると、又、千葉へ来てくれて、助けてもらったのである。玉香が成人式をむかえ、その祝いに千葉に来た時、発病し、帰ってから、横浜で看とられ、なくなつた。

横浜のお母さんの居る時に、家の母は年令としは若いのに突然に旅立ってしまったのである。願つた様に、床に就く事なく、風呂の中で心の臓に異変がおき言葉なく逝つてしまつたのである。

この時父眞澄大人は神職の身分が一級上つて浄階となり、次の日（四月二十一日）その御祝いをするべく氏子、崇敬者の方々を御招きして、御披露する事になつていた。その衣服の仕度をするため、はだじゅばんを縫つていた。

父の黒い色の袍は、括くくりり袴ばかまと共に、神社に届けられていて準備はすべて出来ていた。

参考までに、神職の階位は、次の様になる。

### 浄階（じょうかい）

階位の最高位で、長年神道の研究に貢献した者に与えられる名誉階位。松井眞澄大人うしはこの浄階が贈られた。

### 明階（めいかい）

宮司及び権宮司になるために必要な階位。この階位であれば、勅裁を要する伊勢神宮の大宮司以外ならどこの神社の宮司にもなれる。千葉神社など。

### 正階（せいはい）

禰宜及び宮司代務者になるために必要な階位。

### 権正階（ごんせいはい）

一般神社の宮司及び宮司代務者になるために必要な階位。

### 直階（ちよっかい）

一般神社の禰宜及び権禰宜になるために必要な階位。

また、正装は、

**特級**、黒袍（輪無唐草紋）、白奴袴（白八藤紋）、冠

（繁紋）

**一級**、黒袍（輪無唐草紋）、紫奴袴（白八藤紋）、冠

（繁紋）

**二級上**、赤袍（輪無唐草紋）、紫奴袴（薄紫八藤紋）、

冠（繁紋）

**二級**、赤袍（輪無唐草紋）、紫奴袴（無紋）、冠（繁

紋）

**三級**、紺袍（無紋）、浅葱奴袴（無紋）、冠（遠紋）

**四級**、紺袍（無紋）、浅葱奴袴（無紋）、冠（遠紋）

父眞澄大人は、学校は高等小学校のみで、先生の資格、神職としての地位等、すべて、講習か試験のみで、苦勞して来ただけに、黒色の袍は父親、松井龍雄大人も与えられなかっただけに喜ばしいものだった。

昭和四十七年四月廿一日は一家一族の記念の日になるはずだった。その日が、母が居おらぬ写真を書さねば、ならぬ日となろうとは、考えられぬ、事だった。いつ思い返しても、昨日の事の様に細かに、よみ返って来る。神社御本殿が、出来上ったとはいえ、境内は樹木とてなく、石碑位が有り、まる裸と言える姿だった。母が、本殿裏に松の小木を野呂の石井家より授けて植えた位が、やっと神社と呼べるものだった時である。

急な事で、社宅で通夜、告別式をやったのが、密葬の始めだった。私が座敷の中で棺の守りを、夜中ずつと戸を開けたままに和香健と二人で棺を守ったのである。

私が、千葉女子高の、PTA副会長になった時だったので、校長先生等も参列して下さった。

家は、社宅なので小さいが、庭が廣かったのです。い分の方々がお詣りにみえて、晴れて居るのが、せめてもの幸せであった。

町内の方々、敬神婦人会の方、清子の学友、明子、澄子の友人等も多く、眞澄大人の友人や、教え子等、外の屏にずらり花輪が並ぶ等、語り草になる程の葬式だった。

それまで、戦争後、人よせ事はなかったもので、私など、いつも母の指示に従ってやって居り、判らぬ事ばかりで、仕事でも、他の会合も、戸まどい、どうしてよいかも、迷う事が多かった。

母が元気な頃から父の体は糖尿病がだん／＼に悪くなるなり、入院を繰り返して居ったので、その後は、むつかしく国立千葉病院ですごす日が多くなつた。

入院後、十日位は、妹達と交たいで、泊りに行つたが、たちまち音をあげ、野口さんという家政婦たのんだ。市原郡の人で、この野口さんに、退院しても、ついてもらい、最後の日迄、世話になった。母が旅立ってから、十年たつて父も逝ったのである。

この十年という時間は、長女、清子は筆に書く事の出来ない程の苦勞を味わった。

一家一族の長たる父は、母と違い、強い指導力のある人でなく、弱音を他人にすぐ言ってしまう方で、教え子の近しい人に「後ぞいを早くもらいたい」とずい分言った様で、まわりの教え子の何人かが、私

に「先生から、たのまれましたが、〇〇さんだったら、どうでしょうか」などと言われた時は、何と答えたら良いか、判らず、父に「お母さんの替りは、もうないのですよ。必要な物は言っておき、何でも用意しますよ」と言った事がある。娘なので、遠慮ない事を言ったり、して良いと思っただが、むづかしかった。

糖尿病は、食べ物に注意しなくてはいけないが、日中、家に私が居ない時、菓子屋に串団子を買いにやり、かくれて食べたり、家に居ない妹、明子が、野菜を煮たり、目先の変った物を持って来て食べさせるのと、それが、良くて、明子の家へ泊り込んで帰らなくなり、銀行の通帖と印を持たせる様に連絡をよくこし、私をこまらせた。そのすぐ後に、明子より、「お父さんずつと居るつもりよ、用事が有るから、すぐ帰る様に、電話をよこして下さい」と私が呼び出され、やつと帰ってきた事も有った。つまり、あとさき後先あとしきの事を考える程の人では、なかったのである。多少のお金は有ったので、あろうが、その機嫌をとるのは大変だった。その上お金の出る話には意外と、機嫌をわるくし、年寄りのケチはむづかしいものと思つた事だった。

こんな事を他人様はもちろん、主人の高明大人にも話せず、私の体はやせて「お母さん、何で、一人

で急に逝つたの、お父さんのあの様子を確りとさせて下さいよ」と願った事か、知れない。その間にも神社の仕事はどんどん忙しくなり、前に進む様になりお父さんは家で伏せる生活になり、後妻の事もあきらめた様になった。

家に帰ってからは、家政婦会の野口さんには、ずい分と世話になり、私も安心して神社の事に専一になれた。

母松井なつが逝ってから十年がたち、社宅で十年祭をとり行い一同揃った写真（庭で）が、今一番の記念として、飾られている。

父眞澄大人を中心とした一族は、みな若く昨年（令和四年四月）母の五十年祭をしたのであるが、半分以上の人々は、幽明をさかいにして、居り、五十年の年月は、遠く近く私には感じられ、なつかしいばかりである。

母のあと十年をへて父も旅立だったのである。

昭和の五十七年の頃は、市内に葬祭場とてなく、神社で行つたので、六月の始めゆえ、小雨降る中、多くの方々に御出ましたゞき、盛大なお葬式が出来たのである。

我家で多くの方々に御見得いたゞいたあとは、その関係の方々に御不幸があつた時は義理をかく事があつてはならないと、ずい分気を付けてすごした事

であった。私どもが、不義理をすると、あの世で父や母が恥をかく事になると、心をくばったものである。この中に、夏になるとお盆が来る。暑い日が續く中、新盆として、おあかりを点して、亡き人を偲ぶのは、遺族にとつては、心安まる、なつかしい行事として、我家は、必ず、おむかえに行き盆の三日間はなき父や母の好物を供えて家族で墓詣りはかささないでいる。

今、テレビ等で、これらの行事はめんどうだから墓を片づけたり引越して、「墓じまい」を簡単に出来るから、やりませんか、と言う広告を流している。遠い先祖というなら、まだしも、大変と言うなら判らぬでもないが、自分達の親の墓の事も、対象として話すのを聞くと、この日本の國は、どうなるのだと、呆れかえってしまい、教育のみだが、ここまです来たのかと常々、我家は、若い子達に、先祖詣りのどれだけ大切かを教え、毎朝のおまいりは欠かした事はない。

我家は、祖父、松井龍雄が、千葉での祖<sup>そ</sup>として昭和十三年に新たに造った千葉神葬墓地と、祖母、松井とくが、養女に入つた江戸初期より有る、医者の松井家の墓が市原市に有る。この二ヶ所には、手入れをして、年に四回は、お詣りに行っている。どれだけの費用が、かかるうが、心が安らかになるだ

け、幸せであると信ずる。

## 千葉女子高校とのつれづれ、

松井清子と千葉女子高校とは、書けば、まずまず色々な事で結ばれ續いていった年月と思ひ出がある。

まず、母が、松井の家に嫁した時、お姑かあさんから、「この家で子宝に恵まれたら、まず丈夫な子に育てる事と、男の子であつたら、千葉中学へ、女の子であつたら千葉高女へ入学出来る様にして下さい。両親が学校の先生であるから、そのつもりで育てれば、大丈夫でしょ、」と言われたそうである。

眞澄大人は、本町小学校の高等科で十分千葉中へ行ける学力があつたが、家が貧しく、千葉中の化学教室の助手になつた。その後、教育会で代用教員の資格を得ただけに、昭和になり、結婚し学費の心配がなくなつた時だけに、中学校、女学校へやる事は心願であつた様である。私が小学校へ入つてからも、事ある毎に、この画用紙は女学校へ行つてから、このタオルは女学生になつてから、使うのですよ、と言う様に、土地の小学校とは、別格の上級学校として教えこまれていた。田舎の市原高女とは違つと祖母も母も信んじて話してくれていたのである。

戦争が激しくなつても、受験は確かりと勉強して

おこななくてはと、疎開するに付けても言われて居た。

しかし、六年生の夏休み前に戦災にあい一夜のうちすべて、焼けて、机も文房具も帖面から、教科書等、私達はすべて無くなり、学校へも行かない日々で、親戚ですごし、やつとバラックが出来、雨が降ると、座る場所もない生活が、九月すぎて、どうやら落ち着き、院内小学校へ行つてみて、友達に会えたのである。校舎とてなく、青空教室に、先生のお話しと、体操をやる位で、校庭で遊ぶだけの国民学校だった。その間に、終戦により、軍隊の兵舎の焼け残りが一棟、又半棟と払い下げられ椿森に引越しての勉強となつた。

田舎に疎開して居た友達も少しづつかえつて来て男女合せると六年生だけで八十名位になつたが、教室が、男女分けるだけ数がないので皆んな入つてギューギューだった。だけれども、友達が揃つただけ嬉しく、よく勉強した。先生も一所懸命だった事を覚えてゐる。

上級学校への試験に備え、追い込みをやらなくてはと、椿森に有つた天理教々会を借用して、焼残つた広い和室に、父兄の一人だった吉川組の協力で、座机が勉強机に用意されて、うれしかった事が忘れられない。受験組の子供だけが、天理教々会へ行つたのだと思うが、雪の降つた寒い日、寒風に晒らさ

れず、タタミの上で勉強出来たのは有がたく、雪道を心温く帰ったのを思い出す。

家は、焼けとたんで囲いガラス戸に板戸なく、市原から戦災見舞にもらった筵を下げてあるだけだったが、自分達の家である事に満足し、電気が無かったので「ろう燭」で勉強した。うその様な本当の事である。

同じ事を繰り返して居るには、「ろう燭」が勿体ないと、サッサと覚えて、朝方に又、机にむかっていたのは、必要にせまられた受験態勢だった。

あの時は、その勉強する本もなく、持つて居る人より借りて、写して、字を追ったのである。戦災により私共の家に本はなく知人、親戚に、教科書に類する物、みんな借りて勉強した。

卒業に近づき三月に、電気が、やっと来て、夜の時間が嬉しかった。

中学校、女学校の方も、試験日を、四月に行つて、くれたのである。

國の方も、戦後の混乱期で、明日が判らぬ様な改革の様相であった。

生れる前より目指した千葉高等女学校の合格発表は、白い大きい紙に筆字で、氏名がはつきり大きく書かれていた。

現在の様に番号だけとか、通信の機械によるのと

は異なり、趣の有る風景だった。

焼け出され、苦勞した受験だった故、本人の私はもち論それだけでも嬉しかったが、新聞にも名前が発表されたのである。

地元にある小学校と違い、歩いて五十分以上かかる女学校だったが、クラスの中には、戦災者は、三名と少なかったが、県下各地より（市川、船橋、佐倉、木更津、等）戦後の大混乱の汽車に乗つて通学して来ている方もあり、四キロ位歩いてみえる方も目ずらしい事ではなかった。

しかし、その千葉高女は二回も戦災に会い校舎とてなく、二ヶ所、三ヶ所と建物を借りて授業をしている状態だった。

生徒各自の意気は盛んであったが、学制の改革もすぐあつて、苦勞の續いた年月が六年に及んだのである。

世はまさに変わる時で、千葉中も、女子を入学させる為、女子用の便所を作り、借りて入る私達には水も便所もない、その千葉中の同窓会館を用意された（二年の時）私共の中で、正式に千葉中（千葉高）へ転校する人も居り、まさに、めちやくちやと言え有様だった。しかし、女子生徒が居るのに便所がない様な、有り様だったから、何をやるのも、まず大変で、その千葉高も本校舎でない、戦後に造った、

やわな建物を、私共に貸してくれた。その時、千葉中生徒も乱れており、かくれてタバコを吸う生徒が居り、夕方、その教室の壁裏から出火して、二階建の一棟は燃えてしまった。

二期の中ばだった様に覚えておるがすぐに行く場所がなく、生徒も先生も辛らく、みじめだった。

軍隊の空き倉庫が借りられ、稲毛の小仲台の北地区に行く事になった。

屋根は有ったが、水飲場や便所はなくはなれた建物迄、借りに行った。

その場所は防空学校のあと地だけに土地は広くあったが、女学校とは、程遠い毎日だったが、みんな良く勉強はやった。

半年程で、バラバラになっていた全校生徒が、その防空学校あと地の建物に、一緒になる事が出来た。この時の嬉しさは、先生も生徒も言葉なく喜び、運動も、部活動も良くやった。

我が家も、少しづつ、戦災前のおもかげが、かえり、学校が軍隊そのままの建物、で、大きくおもしろい、機で木の長イスであっても、ガマン出来る物で、うれしくて、勉強する事が、ただうれしかった。

しかし、又又、事件が起った。

火事が、本校舎の一番中心の建物全部が、一夜のうち焼けたのである。

何が、何したか、私達は判らず、たび重なる火災で、どうしたら良いか、思う事は出来ず、生徒会の総会で、会長が、壇上で  
「千葉女子高校舎は焼けても、私達女子校は焼けない」

と叫んだのが思い出される。愛知静子さんだった。彼女は千葉高女に対する気持は深く、今も（令和五年）佐倉に「松籟会さくら」をまとめて活動しておられる。

それから、私達生徒も、個人的に街に出て、どんな、寄附をおおぐ生活をして、復興へむけて活動を始めたのである。

学校は、私立ではなく、県立（公立）で、女学校では一番の歴史が有り、先輩も広く多く、活躍しており、同窓会にも、お声をかけてまわったのである。

しかし、お金を集める事を自分達が理解し、納得するのは、思った様には、なかなか進まぬものであった。この時はたび重なる事件で何か行動しなくては一つも前進がないと、各自に思わせるものが有ったのである。

戦国時代に山中鹿之助が、

迂うき事の なほこの上に積つもれかし  
かぎりある身の 力ちからためさん

と詠んだ言葉を思い出した。

小学六年生で一夜のうちに戦災ですべてがなくなり一夜乞食となり、生れる前からの、あこがれの女学校へ、入学出来ても、その学校は校舎なく、数ヶ所に借りた建物であり、私達は、同じ県立の千葉中でも、不用の建物をやっと思わせていただいたのである。それも不審火で消失し、軍隊の倉庫をみつけ、屋根の下に入ったが、水と便所のないところで、次に教室らしき建物に入ったが、窓は有ったが、窓わくだけでガラスは無かった。

こんなでは上の学校にゆけぬと思う人は、東京方面の私立学校へ転校する人も出て落ちつかぬ校内だった。

しかし、私達同期の人々は、高校三年間、クラス替えがなく、卒業を迎えたのである。

クラスの担任の先生は変わったが、四十名近くの人々は、仲良く、勉強もし、運動会、予餞会など行事に助けあい、いつも一緒に苦労したので、卒業後、同期会など、あとあと迄、集う事が容易であり、九十才の現在、体が動ける人は、お茶会に集まり、諸々おしゃべりをして若さを確認している。足腰悪く、出かけられない私など、ケイタイ電話で話しあい、元気を分けあっている。

苦勞して高校をすごした私達は、どんな所へ嫁に行っても、元気に乗り越えられると話していただけに、話題に事かかず、楽しく集っている。

ただ、よる年波には勝てず、どの人も体の何ヶ所かに体調が悪く、それ等の話の時は熱を帯びる様子でピチピチした若い日を思う事は、何より楽しい時間になっている。

同じ年令としという事は、世間的な、ごまかしや、虚飾は通じないが、事、身体的な事では、その人なりに色々なので、皆、身につまされる。

どれだけ重い病気でも、それを乗り切った話しは、我が身の上には比べる事が可能故に、話しに身が入る。しかし、病気にも、認知症が進み、アルツハイマーとなると、この位、辛く悲しいものはない。(医者にかかけ、入院しても、治療するすべがなく)人間が、だんだんに崩れて、わからなくなり、姉あね妹いもうとも娘も判別出来ず、判らなくなるのである。私には五才下の妹が、この病で亡くなり、つくづく手のほどこせる病気で入院する事は、まだ救いが有るのにと思った事であった。

これが寿命というものであろうか……、昔じゆみの人は、この言葉で、別れたのであろうか、じゆみ命、よい字である、……。



我が家の三人娘（長女清子、次女明子、三女澄子）ともこの千葉女子高へゆき、卒業したが、十年余りの月日で、校舎も順次良くなったが、戦中の兵舎の部分は残っており、近代的な鉄筋の校舎になったのは私の娘、三女の由香里の時代である。それも広い校庭に一棟、また一むねと時間がかかった。

その末娘が入学した時、私は、彼女の小、中学校の時のPTA役員の續きとして、副会長の役をうけたのである。会長は、最首良夫氏で弁護士であられた。

高校での保護者会の役員は、どんな事をするのか、判らなかつたが、入学式、卒業式等、学校行事に参列すれば良い位に思つて居たが、これが、大変な事が待つていた。

千葉女子高は県立故に公立として県よりの指示があり、生徒はおおきいし、当座は何もする事はないと思つていた。

戦災をうけた学校ではあつたが、小仲台の広い敷地に、少しずつ専門科の校舎も建ち、かたちも整つて来て居たが、学校全体の中心に当る、本部建物が出来上つて居なかつた。

（玄関、事務室、校長室、保健室等の中心部分）  
それに、教職員の研究室や、各教科の特別室、実

習室等、高校として、大切な部分がまだ揃つては居なく、その頃は、中学校は一学年、十クラス位が、当り前で、皆、高等学校への希望者なので、県でも市でも新らたな学校新設が、大童で、順番を待つて居る状態であつた。つまり子供が多かつたのである。

千葉女子高は、その中心建物の建設場所は、きまつて居たが、その年度の県の予算が付かず、計画は始つたものの、建設が、つづかなくなつてしまつて居たのである。県下各所に新設校が、しのぎ鋸を削つて居るので、今年度は無理である。

建物を完成させるには、銀行より借り入れて完成させるしか、道はない。となつた様で計画はダメになるとの事だつた。

高校は三年で娘達は卒業するので、この年入学した我家の娘達が卒業する迄、新校舎が出来なければ入れない。何の為の計画だつたのかと、父兄として途方に暮れた。

その時、地もと（学校、及、保護者）が借り入れの保証人になつて、くれれば、銀行は融資致しますと言われたのである。

結果、PTAの会長、副会長、校長の三名が、連帯保証人として實印を押したのである。

私は貧乏はしたが、金を借りる事は個人でした事がなく、まして保証人など、ぜつたいにするでない

と信じて居たので、自分の世間知らずをこの場で、  
ずっしりと感じ、副会長という役の重みを、思い知  
ったのである。

「県の事ですから、一年か二年で片が付きますから、  
大丈夫です」と言われ、会長の最首氏が、「公けの  
事です、心配ないです」と話して下さったので、実  
印を押したのを覚えている。

その時の金額等は知る事もなかったが、学校の為  
と思い、卒業生である私はあまり深く考えずに事に  
のぞんだのである。

建設は予定通りに進み、我らの娘達も無事にその  
新校舎に入れて卒業し大学に進む事が出来た。

暫くたったある日、学校の事務長さんが、来られ、  
「副会長さん、その節は有難い事でした。おかげ様  
で借入れ金全部銀行に返し、無事に収まりました」と  
と菓子折りを持ってみえた。

私の頭の中は、そんな事有ったのさえ忘れて居た  
のでその時の書きものを見る事もなかった。

後日、何年かたち、百周年記念事業委員長と同窓  
会長をやめた時、御苦労様の記念会が開かれた時、  
最首良夫会長が、この連帯保証の書類を持参された。

「長いおつきあいでしたよ、この書き物を見て下さ  
い」と持出し見せて下さった。

さすが法律家だけあると感心して、よく讀んだ。

私も同様の書物をもたらったのだと思うが、覚えがな  
い物だった。のん気と言うか、常識知らずの自分を  
思い、相手が公けの県の学校だから良かったが、事  
なきを得た事と、うっかりをしみじみと味わった一  
件であった。

この保護者会、役員以来、弁護士之最首氏とは、  
それから事有る毎に御相談にあがり、終生の友とし  
て、御交際をいたゞいている。  
御縁というものを感謝している次第である。

清子の娘二人（長女玉香と、三女由香里）も女子高を卒業したが、女子高とは同窓会長として、その後も続いたのである。

家族の者が在学して居た時は、入学、卒業等に参列するだけの役員で役は十分、はたせたのであるが、千葉女子高は創立百周年をむかえる年まわりになつていたのである。

「記念事業」をどの学校もするのですと、何年か前より色々の計画が、学校側より出され検討されていたのである。

しかし、世間的記念行事を色々のべられて始つたのであるが、それ等は、みんな金のかかる事であったが、学校側には特別な予算はなく、すべての始まりが、お金が出来てからなのであった。

公立の学校は表だ<sup>◎</sup>って父兄や関係者に寄附を依頼する事は許されて居らず、このお金を用意するのが、一番大変な、始まりだった。法にふれずに寄附をあつめられるのは、学校としては、同窓会と、在学生の父兄、関係ある出入りの業者位であった。

何回か会合が持たれたが、卒業生各位に御協力をあおぎたいと、同窓会（松籟会）役員は、目を付けられ、記念事業の中心にまつり上げられたのである。時の松籟会々長である私、松井清子が、「千葉女

子高校、創立百周年、記念事業実行委員長」になり、斉藤有代<sup>すみよ</sup>刀自<sup>とじ</sup>が、募金委員長をうけて、この事業は始つたのである。

まづ第一に、同窓会名簿を、新たに作製する事になり、古い名簿を、めくりながら掘りおこし、名簿会社に依託して、新作し、それをもとに、各々自宅へ、記念事業への協力をたのむ書類を送付する事にしたのである。

高女時代の各役員より、何名か、又高校になつてからの、学年毎のクラス役員諸姉の何名かに、土曜、日曜日の午后、同窓会館に御集りいただき、封筒の表書きをして、判明している同窓生全部の方に、一口、五〇〇〇円の御協賛の寄附を依頼する作業が始つたのである。

まず各クラス委員へは、デンワで、この手紙表書きの仕事と同窓会本部役員は手分けして頼んだのである。

この土、日曜日の仕事依頼のデンワをした時、実に色々な反応があつた。

「ご寄附依頼の封筒書きを御願ひしたい」と申しのべただけでも「うちの娘は他家に嫁して居りますので迷わくになる事かと思ひますので、おことわりします」とけんもほろろの方も有り、「それは大変です、あなた方も御苦労様の事です、御うかゞいさ

せます」と犒<sup>ねぎら</sup>って下さる方もあったが、突然の依頼デンワでの世間の風は、総じてつめたかった。

毎週の土曜、日曜の午后は、私達本部役員の数名は、各学年（五学年位づつ）のクラス役員をむかえて、一緒に作業し、皆んなして、母校の百周年記念事業に参加して居るのだと気持がつながり、この奉仕作業は嬉しい事であった。

会長の松井清子と、募金委員長の斉藤有代刀自は、この間、二ヶ月余は、休む事なく皆んなを励げまし、つとめたのである。

その学年同期の方々が、まとまって居る年度の学年は、その後の寄附の成績でもはっきりと現れる事になった。

神社で生まれ、戦災後のむつかしい中、多くの方々に寄附をおおいだ私にすると、同窓会も一つの話題になり、御芳志をいたゞく事は、縁<sup>えん</sup>のうすい人々にも関心を持ってもらえる事となり、大切と思つた事であった。

この仕事をやってのけた私にすると、「金を集める」事は、すべての始まりとして、肝に銘じたのである、それ等の会合の時、「皆んなで協力して元気を出してやりましょう」と音頭をとり声を大きくしても、ちっともクラスをまとめる事なく、実行しない役員なかせの人も有つた。

しかし、わずか六年間だけしか男女共学はなかったが、男性方には、確かりと仕事をされて居られ、高額の（五十万円）御協力をして下さった八木高夫氏から電話をもらい「がんばって！女性軍にすべて負わせるのは大変だよ、しつかりな・・・」と言われた時は、涙が出て、もっと男子卒業生が居たならば、と学び舎をおおいだのである。

後日、一口、五千円としたのは、少なすぎよ、一万円とすべきだった、と言われた時は、女性の社会人として、家計にひびかぬ程と思つたからであるが、おつきあいと思う額は、どの位か、判らぬ事ばかりで、振り返る事が多々有つた。

私達、本部役員は、各自奉仕事業だったが思う様に協力し、皆んな学校の為に、涙ぐましい努力をして下さつた。

役員皆んなの気持が一つになっていったのは見事だった。私は、会長として、二百万円を収めて、皆んなの中心を治<sup>つと</sup>めたのである。

しかし、この募金活動に学校側は、およそ我れわれ同窓生が一所懸命にやって居るのを知って居るにしては、校長、教頭、事ム職員等、自分達が学校側で、皆さんに協力するのは当り前だ、という意気込が、感じられなかった。

土・日は、学校は休み故、同窓会館は開けませんが、

我々には関係ないです、と、ただの一日も手伝いに我々の仲間になる人は居なかった。

P T Aからの役員は、何名かみえたが、主力は、同窓の人々で、生存している役員諸姉のクラスの全部の方々に、募金案内の手紙は届けられた。

校長先生も、千葉女子高あたりでは、定年の前の二年位、現場に就任して、終る方が多いので、百周年記念を、泥をかぶって矢表になる方は居ないのが、当り前だそうである。この同窓会の熱心な作業は、まれな事として写ったのであろう。

今の時代、正面切って募金活動は、県としては許していない様であるから、外部の人々による記念事業は、どこまでも個々の有志による事と在職の教職員は、思つて居た様である。

ただ千葉女子を卒業されて、今、在職の先生方は、校内幹事として、色々な部署を、責任もつてやっていた。

私共同窓会本部役員は、無給で休みなく、学校側の依頼には極力応じ、外部への募金依頼や、会合への出席など、自分の家の仕事をなげうって、学校へ出むいたのである。

百周年記念事業は、お金が、なくとも、出来ることから、準備に手をつけられていった。

◎音楽会―場所は県の文化会館にて記念式典を行い、後に音楽発表をする。

種類―オーケストラ(全国高校、第一位を受ける)合唱、マンドリン、吹奏楽など。

○記念に外人の指導者をたのんだ、作曲してもらおう、など。

○卒業生で、音楽の世界で活やくの方に来葉してもらおう。  
○秋葉京子さんを依頼して居ったが、十日前にキャンセルされ大変であった。(人の道にはずれる大事件である)この十日の間に(本校卒業生の)井口慈子さんに助けていたゞき事なきを得たのである。

○在校生が、普だんから、練習されて居ったので発表という形で、種々、見事に、出来た。

◎絵画、書道、手芸等の展覧会。

○県立の美術館の一室を借り、在校生の作品、卒業生の作品の展示。

○この展らん会は、好評で在校生も多く親ごさんも、毎日みえた方もあった程である。

○沼田県知事も親しく見学され、私が御説明に付き、学校の歴史の深さを味わったのである。

この展らん会の主な作品を、大きな美術書にまとめられ、大浜借子刀自の御主人が出版して下さった。

この創立百周年記念行事も多くの方々の御協力により募金も五千万円余集まり、確かりと達成された。学校側が非協力的であった（集金の始末など、事務的な事）が、一番大変な「記念誌」の編集は、安田伉先生を中心とした文科系の先生達の、本当に言葉につくせぬ程の御心労によって成し遂げられたのである。

それまでも十年位ごとに、記念誌は出されていたが、一年を一月から十二月迄とした編集もあり、四月から次年の三月迄の年度としてまとめた時もあった、確かりとした記録になっていなかったもので、この時、本格的に調べて記録していただき、内容もすばらしい文章で、心の故郷ふるさとになっていたのである。同時期他校でも、百周年行事をやられているが、我が女子高の記念誌が、一番と私は信じている。なかなか、今の時代、紙の重い本は敬遠されているが、時々は、ひらいて読んで欲しい、すばらしいものとなっている。

◎ 記念碑が、趣き深く出来上っている。

現、在学の学生さんは、勿論だが、後々の方が見た時、心に残る物であってほしいと役員皆さんで、案を出しあったので、御影石の色目美しい物で、校歌が刻まれ、型が目新しく、校門入ってすぐの樹木

の庭に、基礎を確かりと、建っている。旧校舎跡にある（中央区新宿町）どっしりとした大きな石碑と共に千葉女子高の看板に恥じない物として自負しておるのである。

大きわざで始まった百周年記念事業も無事に治まり、その最終的な事が、終ったのである。

人様から、お金を集めたのであるから、結果報告は何より重要と、各人それぞれに、氏名と寄附の内容を、まとめ発表する段になり、一部の人々より、「この活動の始めに氏名、金額等を発表すると明示してないので、それは差し控えたい」と動議が出て来たのである。

発表するとなると、学校側事務職は、ものすごい責任と仕事量になるので、極力さけてゆきたい事であった、と、思ったが、同窓会役員でも「各人の真心で納金したのであるから、どんな活動に使ったか、判れば、良いのではないですか・・・」と言う人も有って、各々名前と内容は出さない事になってしまった。会長の私が、もっと確かりとした考えを持って居れば良かったが、これ等の意見にのり越えられ、寄附の台帖は、すっかり、学校への金庫に納めて、一般の人々の目にふれる事はなかったのである。松籟会本部役員諸姉の事も、同様であり、残念な事で

あった。

一年位、おかれて、千葉高も募金活動をやられたが、その最後に、協力して下さった人々の氏名、内容等、細かく印刷されて、発表があった時、私達女性の世間知らずの事を、いやという程味わったのである。

物ごと、ただやれば良いのではない。この記念事業で、学校を、外部に知らしめる事になると共に、校長などの、名前をあげる事に、私達は利用されたのだ、と言う人もあった。しかし、私は、多くの同窓の友が、我が母校として、思いを、一つにして、まとまった事は確かなのであるから、何と言われ様とも、良くやったとの結論で「萬萬歳」である。

皆で、一緒に努力した思い出は、いつまでも元気をもちつづける、ことが可能である。

記念事業で一番あと迄残り讀よまれる記念誌を、根をつめて、まとめられた、安田侂先生は、今（R五年の冬）老いと病で、淋しくホームに入って居られる。先生は、国文の現代物から古典にわたり広く博識であり、音楽も良く話して下さった。この記念事業後、松籟会館にて、私達卒業生に、古典（源氏物語、枕草子、古事記等）や、物語などの講義を下さった。教則本等は、先生が原本をおこし、コピーして下さり絵も入れて下さった。

家庭の雑事にかまけて、復習、予習もしずにポカんと出席する私達に、実に良く教えて下さった。学校での教室と違い、みんな意気をのむ様な空気で趣きあるすばらしいものであった。

「源氏物語」など、京都の街が、目にみえる様だった。

しかし、「源氏の若紫」の途中で先生が体調をくずされ、続ける事が、出来なくなってしまう。この同窓会館での教室は、他の先生のクラスも有ったが、講師先生が、定年になってからの時間での行事だけに長くは續けられないのが実情であった。

この古典教室は、節季の分かれ目に、皆んな揃って、中食会を開き、親ぼくを深め、たのしみだった。毎回、揃っての写真と、おいしい料理を写してもらい、女性の会の明るさと、先生の笑顔が、いつ見ても若さと美しさが、みちている千葉女子高の姿である。

書き始めると、次から次へと記録する事は有り、千葉女子校は私の学び舎である事に変わりなく、女子だけの世界もこれからの月日は、どん／＼と変わってゆく事と思われる。

しかし、女性だけでも、あれだけの創立百周年の記念行事はやったのである。だが外部、内部、の多

くの方々が陰に陽に応援していただいた事が、・・・  
・世間知らずの私達を励げましてくださった、計り  
知れない。うれしい事の一つである。

そのうえ時の千葉県知事に、沼田武先生が就任さ  
れて居られた事、県立高校であり、戦災時の校長は  
知事先生の父上であられた事など、その御縁えんの深さ  
は、行事毎に、嬉しく、頼もしく思った事か知れな  
いのである。

そして期成会々長の最首良夫氏には、PTAの会  
長のときからずっとどれほど目をかけていただいた  
事か、・・・、

がい算すると、二十二年余になるかも知れない事  
になる。私人としても、何事も御相談にのつても  
らい終生の指導の友として、御交際をさせていた  
いて居るのである。

◎竹下定蔵先生のこと、

女子高の歴史の先生として私は「竹下定蔵先生」  
を、一番の長きにわたる指針として、心に残る教え  
をいたゞいた方であるとして、この中に書き止めた  
いのである。

竹下定蔵先生は、千葉女子高を、定年で終られて  
から、地区の公民館や、地域、町会の場で、現代社  
会に起る事件や、天災などを、高校位の知識で判

様に、具体的な日本史をまじえながら、わかりやす  
く語って、教えて下さったのである。むつかしい教  
科書からでなく、日々の新聞記事を身近な事として、  
話して下さい。

私達、戦中戦後の激変の時代、仮校舎等で、十分  
に勉強出来なかつた者達に講演され初老の媪達に、  
ゆつくり学ぶ日を与えて下さって居た。

この御話のその日、その日を記録して本にまとめ  
て残したいと、私が主となって、先生に御相談した  
のである。この頃、自費出版が、流行し、友人の何  
人かは、思う様に自分誌をまとめ、友人、知人に配  
る事がはやって来た。女子高の卒業生で、編集、出  
版をする方も出て来て、話しはまとまり、先生に御  
自分の思う事、記録したい事などを書き出していた  
ゞいたのである。

いざ原稿となると筆まめな先生でも、遅遅として  
進まず、世話役の媪達をやきもきさせた。

先生は、昭和十四年に、女学校教諭の資格を持た  
れ、すぐに奉職したので、やくしよく役職（校長、教頭等）  
には就かず、現場ですごした方だけに、教え子は多  
く、千葉女子高では名物の先生であった。教科書に  
関係なく、どんどん、話しが廣がってゆき、みな、  
歴史が好きになつていったのである。

しかし、その講義をまとめ、本にするとすると、



先生のお年令は百才を越えており、過労で倒れられたら一大事と、戦戦兢兢として待って、印刷の方へ進めたのである。

先生の字は、長らく、どんくペンを進められたので、独得の書体で、とても普通では読めなく、私は、前後の文章で、判読するのが常であり、印刷屋はそれでも読んでくれて、事を進める事が出来た。ただ何回もゲラをとり間違いをみつけ出す事がゆるく、出来上つてから、二十ヶ所以上の思い違いなど、間違いが出てしまった。

部数は残つても良いと一千部ときめて始めた。

卒業生を主として、公民館の生徒さん方へも広げて、宣伝、案内し、希望者に郵送し、送金していただいた。この本は公民館などで、先生が話しをされていただけに、皆さんにうけ入れられ、なかなかよく賣れて、千部は百冊を残す程になった。出版もとでは、「今なら、版もそのまま有りますから、増刷するのが、良いですよ」と、矢の様な、呼びかけだったので、五百部程を追加した。

これが、今度は進まず、残ってしまったので、私は千葉神社婦人会の会員全部に配り、倉庫の残部を少なくしたのである。つまり、増刷分が赤字になったのであるが、この時女子高卒業生が出版関係、新聞社、印刷関係等にも顔がきき、記事に出してもら

い、大きく写真も報道して宣伝する事が出来た事も好結果に寄与したと思われた。結果的に、私が三百五十万円程の出費になったのであるが、良い勉強になった。

つまり、「頑いもの知らず」の一途に、先生の教えを、皆さんに知らしめたい、との思いだけで事はこんだから、出来たのである。

竹下先生には、原稿料はあげられず、出来上つた本を四十冊位、おとどけしたけだった。

若いとは良いもので、この無手法な事をどんどん他人に話して実行出来る事である。

私のこの性格を、主人である高明大人は、一言もとがめる事なく「普通の人は、考えない事ですよ、他人様の為になる事は賛成ですよ、しっかりとやりなさい」と言ってくれた。

この本の単価を何円位にしたら良いかは、ずい分と、調べもしたし、先輩方に御聞きしたのであるが、本の価が一八〇〇円で送料二〇〇円で、計一、〇〇〇円とした。

本を手にした方々から、本当良い本で学校に行っている頃を、しみく思い出しました、という様に好評のお話をいただく事でうれしかった。これが、何万部もでて御金がたんが入ったら、他から、色々な中傷が入ったであろうが、「赤字が、三百五十万

円位で、多くの方に讀まれました」と言うとき世間は納得して下さる。願った事が、皆様の御同意で結果が得られ、私は幸せ者である。

この時は、松籟会長もやめた後の事であるから、私の故郷は「千葉女子高校です」とはつきり答えられるのである。

私は、他家に嫁する事もなく、学校（短大）出ると一ヶ月で、主人をむかえ（むことり）結婚したのであるから、故郷と言えば、千葉女子高は自他ともに認める、ふる里である。

千葉女子高には、大正十五年に平明なわかりやすい言葉の校歌が定められ、現在も歌われている。高野辰之が作詞し、岡野貞一の作曲のすばらしい校歌である。

一、月の桂は手折るとも言葉の花はかざすとも

千葉野の松の色変えぬ、操あらずば何かせむ

二、袖が浦曲を漕ぐ船の驕おごらず倦うまず怠らず

己が勤めに励みつつ御国の民と世に立たむ

何時、口ずさんでもすぐ唱えて我が街がうかぶので、作詞者の高野辰之の生家、小学校、山や川を訪ねる一泊旅行を、四月末にバスで行ったのも、思い

出に残る行事の一つである。

学校の同窓会では今迄、旅行など、一度も行った事がないだけ、どんなメンバーになるか、又集まる事が出来るか心配したが、お声かけを、学年の代表の方にしたところ、三三、五五、年令の違う方々で、同窓であるだけの、諸々の趣のある旅が出来た。

作者、高野辰之さんの、生家をたずね、出た小学校が記念館になっているので見学し、教室の広間で、同行の四十名程で、大浜借子とじ刀自（松籟会副会長）のピアノで合唱した。記念館の方々も、「現在の学校で、今も皆さんで唱っている学校は少いですし、この様に大勢して訪れて来られる学校は、ないです」と嬉ばれ交流を深めたのである。

その学校の外は、緑深い山々、自然そのままの小川など文部省唱歌「故郷」そのままの世界であり、本部役員の大浜さんのピアノ伴奏も、歴史ある女学校の同窓会の面目躍如たるものがあつた。

あの日の大浜さん、海宝一江さん、斉藤有代さん、山岸さん、など、皆さん、お元気そのものであつたが、今は鬼籍に入られ語りあう事が出来ぬが、同窓会が、本当に身近に有って、有難いの一語につきるのである。

昭和七年に母が、松井家に嫁し、女の子が授ずかたら千葉高女に入学させて下さい、と言われただ

け、母は、願ったので、私達は迷う事なく進学して、  
親の指導のもと社会人として、一家を成して居るが、  
つくづく幸せな日々と、感謝して一病息災に喜びを、  
見出して居るおうなおうな 媼おうな である。

今の時代普通の御家には昔の女中さんは居ない。どんな多忙な政治家や商賣をなさって居る御宅も、昔の様に住み込んで、家の中の事をやってくれる他人ひとは居ない。それだけに、色々な、洗濯やら掃除の器具は用意されているが、それ等を使うのは、人間である。

つまり「主婦」となると、自分の身の始末は、毎日出来る位の健康は必要であり、気働きがなくては、台所も、風呂場も、各々の室も、きれいで整理整頓はのぞめない。家を建てる時は、これで、この位の来客が有ったら、もつと広くあつた方が良く、注文すると、その当時は若く元気で子供達も居り広く、良いのであるが、物が、衣類を始め、道具類、食べ物等、どんどん増えて、目が、とどかなくなつて来る。

私達の様に戦中、戦後の、着る物、食べ物なら、何まで、物のない、ないの時代をすごした者には、用がすんだ物も除すてるといふ事は出来ず、押入れや物置場があれば、取っておき、それが再利用出来た時は、うれしくなる。これは、私など、正絹と名が付けば、すり切れてきた物も、継つぎを当てる。この当り前の生活は、自分の健康と整理出来る能

力が有つての事である。今は若い人も、年寄りも、健康であれば、働く場所があり自分の家の中にだけ、生活の場を持たなくとも良い時代になり、子供が、授かれば、家に主婦が居る、というのは、昔の事になつてしまつた。

つまり育児は、母親がやるものでなく、保育所へあづけて、母親も社会人として外に出て働くのは当り前と考へて居るので、衣服や道具類が多くなるより、身をかるくし、必要の時は、自分で好む物を金を出して借りれば良い事になる。つまり、私達世代が、何も身のまわりの物が、ないないの時をへて、昔通りに整えたいと願つた時とは、ぐるりと、考え方が、変つてしまつたのである。

今、我が家は、父、母の時代の冬のコート、布団類が、押入れや納戸に、四季が変わつても出される事なく、じつと納っている。桐ダンス四竿が並ぶ上を天袋として棚を作り、柳行李や、衣裳箱に父の舶来の生地で作られたコートや背広等、一度、上の方にしまつと、重いし、だれも着られないだけ、日のめを見ない事になつている。

昔の物で値の高い物は、毛織物も毛皮もまず、まず、重く冬の寒さを防ぐのには現代の物が、値も安く軽い、年寄りには、この使用勝手の便利さが幅をきかせる。

昔の物の好きな私も、手入れも楽くなく物に替って来ている。それだけ、品数が多くなり、衣更えは、年よりには大変で私は、この急に寒くなり、暑くなる時季は、いやであり、そのうち、出そうと言っている、ダダツト変って来るので、苦勞してしまい、今年の酷暑續きで、どうなると思うだけ情けなく、昔の、夏は暑く、冬は寒いと言った日常をなつかしんでしまう。

冷房機、暖房機とてなかった昔は、手あぶりの火鉢や、こたつ位で、夏も、ヒル、夜通して、冷房する様な事ではなく、通る涼風や、風鈴で暑さをさけ、うちわでパタパタして、着る物で調節したのを思ってしまう。

今年の夏は、ヒル、夜、と二回づつ、汗ぐっしよりのほだ着を替えてすごしたのである。年令が九十才ともなり、水分を一、五リットルは、飲まなくては、と言われ、夜中、だれも居なく、一人で着替えて、居る時、頭より、ポタポタ汗が流れて来て、目に入り足がむくみ、何度も便所に起きた時は、情けなく、父や母も、こんな暑さの季節ときがあったのかと、思い横になった時、考えてしまった。

母は六五才、父が八二才で旅立ったのであるから、自分の体が、楽くに動かない日常など、なかった、と思ひめぐらし、高齢化の現代に生きる私達の日々

と、すごし方を、考えてしまった。

木綿のはだ着は十枚位、あらた新入りに入って、着替えにそなえたが、替えた時はサッパリとして生きかえった様になり、うれしくなる。しかし、二時間もすると汗がジーンワリと出てきて、ぬれた雑布をまとった様で、つらくなる。

夜、床に入りやつと寝て、二時間もすると便所へ立って、サテ横になろうとすると汗で背中が寒くなる。これが、年寄りの夏の夜なのかと思ひ、若い時にはなかった事だと、しみじみ考え、痛いところがないだけ幸せと、朝がたの眠りに付くのである。

大汗をかき、苦勞したが、肌着でも私は、正絹の物を、外出の時は着用する事にして、のりきついている。絹という物は、人間の体に対しては実に良く合う。夏に発汗し、冬に保温され着ていて安心である。ただ摩擦まさつに弱く、上手に扱わなくては、すり切れてくる。化学繊維の物は、すればと人間の皮膚がいたんでくるのである。

その上、絹は値が高い。今、物は中国の品が多いが、二十年前位と違い、品物が、うす手になり、弱くなつて来ている。

その点、着物は日本の絹であるから、私は大切に着て、手入れをしている。ただ今は、体型が、前に百度も曲つて居るため、どうしても着る事が適わな

い。

冬暖かで、夏涼しい着物は、是非に着たいが、今の人々は、その着装がむつかしいからか、すべて他人に手伝ってもらわなくては、出来ぬと手を通さない。情けない事である。

妹から、これ等の着物はただとって置くだけでは、あとの人達が、始末に困るのでは、と、何回となく言われたが、「着る事が好きで、大切に扱ってくれる人があれば、何時でも、おあげする」と答えているが、声をかけても、希望して手を上げる人にあわず、いまも、私の桐ダンスの中に鎮座している。

戦後のゴタゴタの頃、国学院大学で

「女の方が、着物を着て日々の生活が出来るおちついた、日本が、早く返って来たら良いですね」

とお話しされた教授が居られたが、世の中の進みは早く、女性は日本史の中でもとくに、活潑に、どんどん前に出て、個人の財産が持てる様になった。時間の割りふりも平等で着装も早く、活動的な洋服になってゆき民族衣裳の着物は、かげがうすくなつたのは否めない。

昔の主婦は、家人すべての着物の手入れをして夏が近づく、暑さをうまく調節出来る物を用意し、秋口には、冬の寒さを受け止める袷せや綿入れを準備し、それ等を手入れして、縫い直し、染め直して、

大切に生活の糧を守ったものであった。

まさに、母、松井なつは、主婦の鏡の様であの戦後の物のとぼしい時代を、確かりと家政を整え、家族を守ったのである。

本当に昔は、物をすてる事はなかった。その母に、朝に夕べに教育されたのであるから、私が、手入れをしながら、物を長く使うのは、自然の成りゆきであり、お金は大切にしてためる物と、教えられたから、貯金はどんな時でも、積み立てて来たのである。

「チリも積もれば、山となる」の喩えの様に神主家として、清貧の生活で、不自由は感じなくて、成長した。

神前からのお下り物、と到来物の多い家であるから、それ等の大切な、いたゞき物を感謝しながら食べる生活は、外食など考える事もなかったが、事ある時は、散財もした。

小さい時の日々は、その人の生活を作ると言うが、私の金を使わない日常は、この若い日々につちかわれたものである。

お金は無くても大変つらいもので、有りすぎてもむつかしいものである。廻りの人々の生活から色々みて思うのであるが、適当に有るのが、一番よさそうである。これが、なかなか、むつかしく、大変な事である。

仕事からはなれ、無収入になっても、年寄りなりのお金は要る。人様と交ると、それなりの、お金は出てゆく。これが、人生の潤滑油と思う。とどころと世の中味けなくなり、世間が狭くなる。

あの世とやらで、父や母が、肩身の狭い事になつてはならじと、気を使い金も使う。

昭和廿九年結婚して世帯を持った時、明治神宮よりにいたゞいた御給与を帖面に付け家計簿を事細かく書いた日々があった。一日の仕事に、くたくたととなり、その日の支出を書き出し、まとめると、必要な物は、どうしても出てゆくし、ムダと言える支出はないとわかると、私は、帖面に記入する事をやめた。ムダな労力と思つたからである。一定の預金は、どんなにしても、やる。これは変らず、実行して来た。現在は、何でも、すぐ忘れるので、支拂うべきものはすぐに支拂い、後日、いやな思いは、ない様にと帖面には記入している。

今の私の生活は、体調を整える為だけに、お金をかけているので、其れ相当の支出が有るが、なくて困る事もなく、たまに来る孫達にも、御年玉位は、あげる事が出来る暮らしである。

ただ、広い家の中、ためにため込んだ、風呂敷や、タオルハンカチ、ほごした着物類の反物等も、次の出番が、何時になるかと、いっばい有るのが、今は、

なやみになって居て、こんな時代が来るとは思つても、みなかつたと、自分に言い聞かせている所である。

母は良い時代の旅立ちであった。五十年前は何でも大切にしてい、つましく使う時代であつたからである。

今、世界は（二、〇二三年）、大きな、戦争の始まりの様に先が見えない、争いの中にある。毎日、テレビではおだやかであつた生活と、破壊され、泣きさわぐ民衆の姿を写して居る。どれだけの理屈を付け様とも、どちらにも、益する事はないのであるから、争いはやめるべきである。

人間の欲とは、どこまでも終りは、ないのであるうか、中位のところで、すごすのが、幸せと思うが、どんなものか、<sup>よわい</sup>齡、九十才にもなれば、だれでも、この位が一番と思う様に、なると信ずる。

大河ドラマを見ても、苦勞して居る時代の方が、意気は盛んで面白い。一緒に努力をして居る様で、楽しくなる。他を押しつづぶして進むのは嬉しくない。必ず、自分も潰される時が来る。戦いで殺しても、次は殺される番になる。

国をあづかる地位になつたら、この当り前の事を確かりと、<sup>きま</sup>肝に銘ずるべきである。戦さが終る毎に、何度も色々な約束事をきめても、又、戦さは續く、

人間とは、どこまでも馬鹿なものである。

そこに、宗教があり、絶対的なものに祈る世界で生きてゆけると思う。

この廣い地球でも、四季があり、おだやかな自然の中にある日本は、幸せな国である。感謝しすぎさなくては、ならぬ。

十一月を前にして、年賀状を考える時、良きお正月を迎えられる事を思い、日本人の幸せをかみしめる、昨今である。

お正月 新しき年  
平らな老いの おおな 媪 持って来る  
めざして、

お正月、うれしき 年を持ってくる  
思い出生きる 媪めざして、

R 5、  
10、  
27、





## 添え書き

祖父の手による『日誌（戦災以来） 松井眞澄』の編纂を、母松井清子が手がけているとき、私はその補助をしたのですが、故人の文章を読み解くのがここまで大変だとは思っていませんでした。そういうこともあって、母に、ものを書けるうちにぜひとも、母自身が見聞したさまざまなことを文章にして書いて欲しいとお願いしました。

結果は、望外。

まさか、九十才のおばあちゃんが、これほどの、質と量の文章群を書けるとは。その明晰さ、その迫真性、うなりました。

自分の母親のことを、老いということ、どこかであなどっていたと反省しました。

母松井清子のものの見方、考え方、大げさにいえば思想ということになりますが、これを全面的に肯定する読者は少数かもしれません。どこか懐疑的に感じたり、これは守旧ではないのか、などと反発したりする方々は（私を含めて）少なからずだとは思います。

しかし、母が母の九十年のうち少なくともみつもっても、おそらく半世紀五十年間ぐらいにわたって、陰に陽に、千葉神社と一族の心柱として立ち続けたことは我ら一族の誰もが疑わないでしょう。

そういう女性の力と誇りのみなもとをうかがいしるてがかりがここにあると信じます。

令和五年 秋

長男 松井和香健



# つれづれに

松井清子文集 一

令和六年五月一日 初版発行

著者 松井清子

千葉市中央区院内一―八―十  
電話 〇四三―二二二―七四〇五  
〇八〇―八四七九―二二二七

発行者 松井和香健

東京都新宿区南榎町五十七番地  
喜楽荘一階一号室  
電話 〇三―三二六〇―八七五五

印刷製本 株式会社プリントパック  
京都府向日市森本町野田三―一







